

# ヨーロッパ史における女性と社会

(02401010)

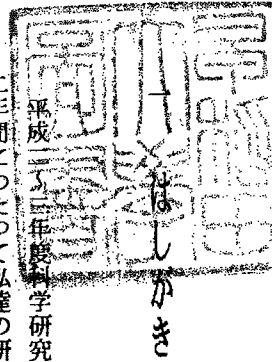
平成三年度科学研究補助金（一般研究A）研究成果報告書

平成四年

研究代表者

村井誠人

（早稲田大学文学部教授）



平成一三年度科学研究費補助金(一般研究A)の交付を得て、二年間にわたって私達の研究グループは研究活動を続けてきたが、ここに不十分ながらも報告書を作成する段階に到達した。

欧米での女性史研究の昨今の進展ぶりには、目を見張るものがある。これは、歴史研究の対象が旧来の人物、政治史、国家機構といった領域から、社会構造、日常生活、「心性」といった方面にも拡大されたことによる。女性の地位向上、社会での進出、ふりがそこに大いに影響し、その女性自らによる「女性史」が本格的に著されるべき時代へと、私達の「時代」そのものが移行しつつあるのである。

これらの欧米の女性史研究は、「偉人伝」的なものよりもそれぞれ時代、地域の社会、家族の中での女性の地位、役割、さらに女性観といったものを扱っている。そして、それが社会構造的枠組みの中での、従来、その中に常に存在してきたにもかかわらず、往々にして欠落させられてきた部分の復元的作業であるということをも考えるならば、歴史を研究する者にとつては、いつの時代、いつの社会を考える際にもこの視点を避けるわけにはいかないことは明白である。

そこで、十人の研究者から構成される私達、研究グループは――従来、社会構造的的研究方法とは縁遠いながらも――、それぞれが今まで扱ってきた歴史的「場」における「女性」を扱うことにより、狭い視野ではあっても「ヨーロッパ史における女性と社会」を検討してきたのである。

本報告書は、本来めざしてきた目的に必ずしもふさわしいものではないが、総説および各分担者のそれぞれの報告を集めたものである。

## 一、研究グループ組織

研究代表者	村井誠人 (早稲田大学文学部教授)
研究分担者	山本俊朗 ( )
"	野崎直治 ( )
"	栄田卓弘 ( )
"	安斎和雄 ( )
"	野口洋二 ( )
"	小林雅夫 ( )
"	大内宏一 ( )
"	前田 徹 ( )
"	井内敏夫 ( )

## 二、研究経費

平成二年度	八、〇〇〇千円
平成三年度	三、五〇〇千円
計	一一、五〇〇千円

## 四、研究発表表

### (一) 学会誌等

村井誠人

※「オーゲ・フリースとゾルフ書翰」『史観』一二四冊、平成三年三月

安斎和雄

※「リーニユ大公の『ユダヤ人覚書』」『社会科学討究』一〇四号、平成二年六月

野口洋二

※「メロヴィング朝ガリアにおける異教的伝統とキリスト教」『文学研究科紀要』三六号、平成三年一月

小林雅夫

※「ローマ軍の軍医」『文学研究科紀要』三五号、平成二年一月

大内宏一

※「ナツイオナール・ツアイトウングと一八八〇年代のドイツ自由主義」『文学研究科紀要』三七号、平成四年一月

前田 徹

※「ウル第三王朝の *gurunada*」『オリエント』三三卷一号、平成二年九月  
※「シュメール初期王朝時代末期におけるラ

井内敏夫

※「ジェスポスポリタ、あるいはポーランドにおける共和主義の伝統について」『史観』一二四号、平成三年三月

※「一二五三年のボズナン市のロカーツィア——その事業過程と空間的構造を中心にして——」『早稲田大学社会科学研究所、研究シリーズ二九、ロシア・東欧の歴史と文化』平成三年

※「一四一五世紀前半のポーランドにおける王と国家と社会」『スラヴ研究』三七号、平成二年

### (二) 口頭発表等

山本俊朗

※「フヴオストフ事件をめぐる」(早稲田大学史学会、平成二年一〇月)

大内宏一

※「ナツイオナール・ツアイトウングとドイツ自由主義の統合」(比較法史学会関東部会設立大会、平成四年一月)

ガシュ市のエンシ権とルガル権」『オリエント』三四卷二号、平成四年三月

※Father of Akala and Dadaga, governors of Umma, *Acta Sumerologica*, 12(1990).

(三) 出版物

栄田卓弘

※『イギリス自由主義の展開』早稲田大学出版部、平成三年三月

野崎直治

※『ヨーロッパ中世史』有斐閣、平成四年三月

総説

人間を分類する際の最も明瞭な規準は、生物学上の男女の性的差異であろう。人間のすべての営みの根源は、この男女両性の共存を基にし、すべての歴史的存在者はこの男女の交わりによつて生ずる。それにもかかわらず、一般的には人間の営みの歴史では、その一方の存在である男性を中心にして、女性の存在を軽視するということが、きわめて永い間にわたつて慣習となつてきていたといえよう。

コペンハーゲン大学のヴァーメン助教授は自らの離婚原因を「人間三千年の歴史故」とする。妻による離婚の要求の申し出に対し、自らの過失はもとより妻の過失をも何一つ見い出せないままに、ただ妻——本報告書内の村井誠人分の参考文献第三書の著書——の側の結婚生活を終らせたいとする意志を尊重した。男性であり歴史家である彼は、「女性を虐げてきた永い人間の男性中心の歴史」を考慮するがために、妻に抗することを放棄した。デンマークをはじめとする北欧では、一九六八年に始まる「若者の蜂起」によつて旧い社会秩序・価値観が問題視され、七〇年代の時間の進行とともに性教育を原点とする両性の平等が実質的につぎつぎと現実化されていき、「フェミニスト」なる呼称が特別な人々を指す言葉ではなくなつていった。人口が少なく社会機構が比較的単純な北欧諸国においては、男女平等の原則が社会に根付いていたのである。一般にヨーロッパ史の中で常に一步も二歩も遅れて「社会的発展」を経てきたことにより、社会問題をそのタイムラグによつて比較的容易に克服してきた北欧諸国が、この両性間の社会的平等に関しては、七〇

年代以降、すべての欧州諸国のそれよりも先んずる状況を呈するようになる。こうした状況下に、男性優位の歴史に責任をとろうとする前述の助教授のような人物が登場し、そういった人間の歴史を問題視する流れが現実味を帯びてくるのである。

それは西欧的民主主義の発展という尺度からいうところの最高到達点における一現象であろう。したがって、時代と場所が異なる歴史的諸相における女性と社会の相関は、それぞれに何らかの特徴を呈することになるだろう。近代の「民主主義」思想の出現以前、また、それが社会的に十分に浸透するに至るまでの状況は、どのようなものであろうか。はたまた、西洋とはいえ、ロシアなどのように、西欧的価値観とは本質的に異質の部分があるようなところでの状況はどのようなものであろうか。

前田徹は、シュメールにおける王妃の一断面をウル第三王朝第三代の王アマラルシンの妃で、次王シュシンの母とされるアビシムティに焦点をあてて論及している。神権政治の時代に王妃として存在した一女性が、西方のセム系の文化がシュメールに移植される際に「何かしらの西方的宗教儀式を導入」し、イナンナ神の性格変更

に大きく関わったであろうと、推論している。古代における神権政治にあつては、特定の地位にある女性が「宮廷内に隠然たる勢力を持つ」ち、祭祀をも変更しうる可能性がそこでは論じられ、殊にキリスト教の影響下にある西欧史的状況とはきわめて大きな対照をなしていることがわかる。

古代ローマの女性を扱った小林雅夫の報告では、人口減少に悩んだローマ帝国が当時の「小さ過ぎる家族」を選択する支配階層の人口抑制傾向に憂慮し、出生率の向上を図った婚姻法を産みだしたそ

の社会状況を、近年の家族研究・女性史研究の成果を考慮して検討している。「子供を産む道具でしかなかったギリシアの女性とはまったく異なる新しいタイプの女性」の出現をローマ帝政初期に見、そこでは、政治的自由はないものの結婚や相続に関する社会的自由と経済力に恵まれたローマ帝政期の「上層階級の活発な女性たち」の存在を指摘する。「歴史上ローマの女性が注目を集めるのはこのためである」とし、避妊・墮胎が容認され、政治的自由・社会的自由と経済力に恵まれうる西欧現代女性の存在と比較・対照しうる歴史的状況を紹介している。

「古ゲルマン社会における女の地位」を、タキトウスの『ゲルマニア』に則つて解説する野崎直治は、「女の地位は、少なくとも男の地位より低くはなく、むしろ観念的であるにせよ、ほぼ男と同じだったと考えてよい」とする。「きわめて少数の人びと（貴族）が」一夫多妻を容認されていたのを例外とし、「一夫一婦制を厳守したのは、総じて諸多の蛮族中、ゲルマン人だけだったといわれ」、タキトウスの意図に「ローマ人の婚姻の乱れに対して有効な警世になると確信している」と指摘する。しかし、ゲルマン古代の一夫一婦制の特徴を幾例も紹介し、それらが「地位が男女の間で平等である」という証左に用いられる際、不貞をはたらいた女性側のみが厳罰に処せられ、また「処女だけに結婚が許され、妻となることは、生涯に一度だけにかぎられる」という文脈こそ、現代の男女平等論からはまさに批判される現象であり、むしろ小林の指摘するローマ女性の存在に共感を憶えるというのが、現代の状況であろう。歴史のアイロニーの浮上である。

野口洋二は、西欧中世における女性の社会的地位がこれまで一般

に低い評価を受けてきた理由を、教会の説いた女性観と封建的貴族階層の女性に対する近代の理解の二つを挙げている。ところが中世前半期（五〇〇―一二〇〇年）に限定してみるなら、女性が果たした社会的政治的役割の重要性が――王侯・貴族の女性に関する記録、それも一部の女性に関するものとはいえ――、近年の研究では指摘されはじめ、従来の理解を変更せざるをえないと指摘している。それでも、一―一二世紀には女性の活動は大きく制約されるに至り、統治機構が整備されるに従って、王妃の権力は極度に低下し、また教会改革が進行し、教会から貴族権力を――したがって女性の活動を――排除しようとする動きも現われ、さらに一二世紀半ば以降ドイツでは女性が封を相続するケースが稀となり、結局女性は公的な社会的政治的領域から排除されていったと説明する。こうして、社会的・制度的機構が整備されるほどに、西欧社会の枠組みは、男性中心の社会へ、そして女性の活動を家庭内へと押し込める方向へと向かったのである。

中世後期のポーランド史を扱う井内敏夫は、ポーランド王国の相続権者であり統治権をもつヤドヴィーガを紹介する。一〇歳でポーランド女王に即位し、一二歳でリトヴァ大公ヤギエウオと結婚、一三九九年に二五年の短い生涯を終えたこの女性を一五世紀後半の年代記作者のドウウーゴシュが「聖なる女性」としてきわめて好意的に描いている様子を特筆している。彼が描く理想的女性としてのヤドヴィーガ像――恥じらいとつましき、謙虚さと優しさの「女性らしい気品」をもつ統治者――に井内は、「理想的女性として」「現代においても違和感はない」とする。リトヴァ大公ヤギエウオは彼女の他に三人の女性を妃とし、そのうちドウウーゴシュがヤドヴィー

ーガのみをことさらに詳しくそして好意的に描写した理由は何なのであろうか。かりにその理想的女性像の資質が本来彼女に備わっていたのだとしても、それ以外の理由があつたはずである。ポーランドの外で育った王国の相続権・統治権をもつ一二歳の「女王」が、外国人と結婚し、その婚姻によって「統治には向かず、狩猟に才能をもつ人物」がポーランド王たる資格を得、その築いた王朝――その女王から派生する人物はひとりとしていない状況で――の年代記作者が、彼女の高邁な理想的「気品」を語るることによつて正統的パテとしての機能を強調したとみることができ、まさに「現代においても違和感はない」とする時代を越えた理想的女性像がそこに描かれても不思議ではないであろう。そして、歴史上に現われる女性の存在機能として、血統の、まさに「正統の」創始者・運搬者としての機能を指摘できよう。

「近世フランスにおける女性と社会」を論ずる安斎和雄は、一見女性優位かと思わせるフランス近世の特殊な文化――一七世紀末に中小サロンは八〇〇を数え、一八世紀においてはさらにその数を増したとか、サロンでの会話から醸し出された新思想とその革命への影響等々――はフランス文化と社会は厳然として男性中心であるという壁があつたればこそ生じたと指摘する。「女性の社会的地位が大きく変わらだすには、産業革命と第一次大戦、そしてとりわけ第二次大戦後の世界情勢をまたねばならなかった」と述べ、北欧を含めた西欧社会が殆ど時期を同じくして女性の社会的地位の問題がとりざたされていった状況を示唆している。

ロシア史を専門とする山本俊朗は、ニコライ・トウルゲーネフのロシア社会に対する批判の言葉を引用しながら、ロシア社会の西欧

社会との異質性を示しつつ、西欧的合理主義のロシア社会への不適応性を指摘している。それでもトルゲルゲ・ネフは「ロシア社会が危機に陥ったときに、決起するのがロシアの女性である」と「ロシア女性のたぐい稀れな美質に期待を寄せる」。農奴解放が行われて、ようやく一九世紀半ばになつて人間解放があつてこそロシア社会の女性に視点がすえられ始め、このときになつて「にわかに花が開いた。ナロードニキ運動に女性が輩出した。ロシア革命前史は彼女たちの活躍なしには語りえない」と山本は説明する。その時代が、内容はともかくも一般に西欧においてもインテリ女性らが社会的に活動しだしている時期に合致していることは注目し値する。

さて、西欧社会にあつて婦人解放思想の先駆者の一人はJ・S・ミルであろう。本報告書内で栄田卓弘がイギリスにおける「ミルと婦人参政権運動の再考」を論じ、村井はミルの一八六九年に著した書がその年のうちにデンマーク語に翻訳され、大いに北欧で議論されたことを紹介し、また大内宏一もドイツの女性解放運動の性格をイギリスの状況と比較して論ずる際に、ミルの名を挙げてイギリス女性の地位がその時点でより解放されていることに言及している。すなわち、ミルは各国に先がけてイギリス社会に当該問題を提起し、「現実の婦人参政権運動に画期的な役割を演じた」人物である。栄田はバーバラ・ケインの「当時の実際の婦人運動におけるミルの役割をきわめて批判的に捉え」た論文の内容を紹介しながら、ミルの婦人参政権運動及び関連する問題に対するスタンスを明らかにしている。ミルの「伝染病法」に対する態度とその根底にある参政権第一主義がケインの非難するところであり、それらを栄田はミルの戦略上の現実主義として「その時期においてはむしろ妥当とも思われ

たもの」とし、ケイン側の論理に「説得力に欠ける」とする。また運動の指導者としてのミルの資質の問題点をケインが指摘するところに関しては、「優れた理論家も組織者としては不適格である場合が多い。ミルも例外ではなかったのであらうか」と栄田は敢えて否定はしない。このような状況から、そこにおいてはフェミニストであらうケインが、かなりの性急さで従来の女性解放運動史を現在の女性運動の立場から、改めて検証しなおそうとしている様子がうかがい知れよう。「婦人運動」ではなく、まさに「女性運動」として女性史を再構築することをめざし、今や西欧諸国では次々と女性による論文や著書が生みだされているのである。

「一九世紀のドイツの女性」において、大内がドイツにおける「近代的で市民的な家庭」の出現とその特徴を、「ヨーロッパ諸国に大きく共通する流れの中に位置」づける一方で「或る程度まで独自の軌跡をたどった」ものとして論じている。それは村井の「一九世紀のデンマーク（北欧）の女性と社会」における都市のインテリ家庭で育つ女性達の存在の説明を補完している。一八世紀末に制定されたプロイセンの一般ラント法によつて「少なくとも一九世紀の半ばまではドイツの広い地域の女性のほうがイギリスの女性よりも民法の面で恵まれた立場にあつた」とする指摘は、イギリスをデンマークに替えればそのまま通用する。第一次世界大戦の直前の状況ではイギリス同様デンマークの女性の地位のほうがドイツの女性のそれよりも高くなつていた。大内が「イギリスにはドイツよりもリベラルな社会が存在したこと」をその理由に挙げているのを、同様にイギリスをデンマークに替えることで済むのである。こうして、ヨーロッパ諸国はペースの違いはあつても、一九世紀後半から女性

の社会的な地位は確実に向上していったのであり、そのペースの違いこそ、それぞれの社会の近代化過程の特徴の一端が現われているのである。

そして、大内が指摘するように、近代的市民的な家庭は、一面女性の負担を軽減したとはいえ、「かならずしも女性の解放を意味したわけではなく、むしろ女性の役割を一定の枠の中に限定し、押し込める結果をもたらした」。「そのような枠の中で『男らしさ』、『女らしさ』についての一群のステロ版的なイメージが形成され」、「女性が社会の中で果たし得る役割の可能性が大きく狭められた」のである。この二分論は、村井がデンマークの事例を以て説明する国政における女性参政権の確立といった問題の解決をもつてしても、解消されずに残り、「一九六〇年代末に始まる社会意識の大変革によって、女性を含むすべての社会的枠組の変化が生じた」北欧において、その二分論が実質的に揺ぎ始め、変質をきざしたのである。

前出のヴァーメン助教教授は、五歳の娘の養育を週の三日を自分のもとで、のこりの三日を管ての妻のもとで、そして最後の一日を娘の引き渡し・引き受けの日として暮らしていた。犠牲は子供であり、家族が崩壊する危機をどう乗り越えるかが問題となる。そして、デンマークでは一九八九年一〇月一日から同性間の「結婚」が「登録パートナー」registreret partnerskabとして法制化され、国家も社会的実状を追認・追隨することに急である。

以上、内容の時代順に研究分担者の報告をそれぞれの社会と女性の関係を視点として、きわめて主観的に繋げながら論じてきたわけであるが、全体をとおして「女性史」の方向が多少なりともおぼろ

げに見えてきたといえようか。時間的にも空間的にも広大な領域を扱わざるをえない西洋史学の、そしてそこにおける「女性史」の困難とやり甲斐を痛感させられた一般研究であつた。

(村井 誠人)

## ウル第三王朝の王妃アビシムティ

前田 徹

### 一 はじめに

今回の主題は、ウル第三王朝第三代の王アマルシンの妃で、次の王シユシンの母とされますアビシムティの活動についてドレヘム文書から二、三考察を加え、セム系の文化がシユメールに移植される面に果たした彼女の役割から、シユメールにおける王妃の一断面を示すことにあります。

セム系の影響を端的に示すのが、ウル第三王朝の王の名でありましょう。よく知られているように、初代ウルナンムからシユルギ、



アマルシンまでの三代はシュメール語名ですが、第四代シュシンと第五代で最後の王であるイッビシンはセム系のアッカド名であります。親から子、もしくは兄弟間の継承という同一王家・同一王統にありながら、その名がシュメール語からアッカド語に変化しています。まさにその時期に王妃としてまた王母として活躍したアビシムティが、この変化に何らかの役割を果たしたと思われるのであります。これについて、第一に、セム系の文化を背景としたシリヤ・北メソポタミアにおいて崇拜されたダガン神(注1)のシュメールへの導入、第二に、イナンナ神を祭るウナア(Enan-na)祭儀の開始から考察したいと思ひます。第二点に関してはイナンナ神の性格が、戦闘の神から愛と豊饒の神へと転換したこととも関連付けられましよう。すなわち、性格の変化にシュメールのイナンナ神と同一格とされるセム系のイシュタル神のイメージが作用していると推定されるのであります。

さらに、茫漠とした話になりますが、シュメールにおける聖婚とシュシン治世の改革という二つの問題にも触れ、今後の研究課題の方向性を探りたいと思つております。

アビシムティその人の話から入ります。アビシムティがアマルシン治世にニン(妃)であつたことは確かであり、シュシン治世にはnin-gar(ニンガル：皇太后?)と呼ばれていました。彼女の母については、アマルシン二年の文書 OF 47/49, 15 に a-am-ma ama-ninとあり、あくまでも直感ですが、アアムマという語感からすれば、そう高い地位の女性とは考え難いのであります。

ただし、アビシムティが、シュシンの生みの母かどうかについては、疑念なしとは言えません。その理由は、第一に、シュシンがシ

ユルギを父とする円筒印章を残しており、それがただしければ、アマルシンとシュシンは兄弟になること、「シュメールの王名表」にはシュシンがアマルシンの子であるとするものの、それがなお不確定であること。第二に、アビシムティの兄弟であるババティの円筒印章において、彼女を「ama-ki-a-ga-ni 彼(シュシンの)愛する母」とあつて、「彼の母」でもなく「ama-tu-da-ni 彼を生みし母」ともなつていないからであります。「愛する」とわざわざ書き記す意味が何かを他の例証に当たつて検討すべきであり、なお確定的なことは言えません。

アビシムティは、少なくともシュシン九年の前半には生きており、十二月には亡くなつています。

## 二 ウナアの祭り

第一の問題点であるウナアに移ります。ウナアとは、月がまつたく見えないとき、つまり新月の数日か一日前のことであります。この祭りのために二五、六日ごろに家畜が支出されていることが、ドレヘム文書に記録されています。ドレヘム文書では祭りの日より二、三日早く支出されるのが通例ですので、ウナアの祭りが二八、九日あたりに実施されたことは確かであります。この祭りにアビシムティが関係するのであります。このことについては、すでにジェイコブセンが指摘しています。(注2)彼の論文は一九五七年と早い時期のものであり、細かい事実関係については訂正すべきところ、例えば、アビシムティがウナアの祭りに関係するのはアマルシン治世のみで、シュシン治世には関係しないことなど、多々あります。そ

れは公刊史料が少ないからで致し方の無いところです。ウナアに関わる文書を集めて年代順に整理しますと、アビシムティがシュシン治世においても関わりを持っていたことは明らかです。

ドレヘム文書において、ウナア記事が現われるのはアマルシン六年三月からで、それ以前には現われません。ウナア記事が比較的に遅い時期からしか現われないことについて、二つの問題点が考えられます。第一にアマルシン五年以前に、とりわけシュルギ治世にウナアの祭りが實際取り行なわれなかつたのかどうか、第二に、アビシムティがアマルシンの妃として二年からドレヘム文書に現われるにも拘らず、ウナア関連でこのように遅く現われるのは偶然なのかどうか、であります。つまりは、アビシムティがウナアの祭りを創設したのかどうかの問題になると思います。確証はないものの、現時点では、肯定的な解答が与えられると想像しています。

アビシムティがシュシン治世までウナアに関係しますが、次のイツピン治世ではゲメ・エンリルラが関係します。この職務を受け継いだのでありましょう。このゲメ・エンリルラは同名のイツピシンの妃（ニン）と同一人物であるのでしょうか。そして、王女で、ニヌルタ神のルクル神官のゲメ・エンリルラとは別人であると思われるます。

ジェイコブセンはウナアの祭りを取り上げていますが、どの神が関与するかは論じていません。私自身は月の祭りですからナンナ神が関係すると推定していたのですが、そうではなく、イナンナ神の祭りではないかと思うようになったのであります。

イナンナ神がウナアに関係する記事は、聖婚の儀式で有名なイシユメダガンの讃歌の中にあります。そこでは、「諸国の運命を定め、

最初の日を正しく見極め、ウナアのときにメを完全たらしめ、新年の祭りの日に、わが女主（イナンナ神）のために臥所をつくる」と書かれています。今、根拠にしようるのはこれしかありません。ただし、アビシムティの活動を見て気付くところですが、彼女は都市を巡っています。それが、ウルク、パドティビラ、ザバラム、ニップルなど、イナンナ神の主要神殿が存在する都市であるところにイナンナ神との関わりを求めることができるかも知れません。（アビシムティは、ウルサグリグにも出掛けます。その主神はニンフルサグ神でイナンナ神ではないようです。ウルサグリグへはシュルギをはじめアマルシン、シュシンが行幸しており、何か王家に特別の都市であつたのかもしれませんが、よくわかりません）。

一応の結論として、 $E_{11,11,11}$  とイナンナ神が関係付けられる。したがって、月齢に応じた祭りである  $\langle \omega \rangle E_{11,11,11}$ 、 $\langle \omega \rangle E_{11,11,11}$  が一グループを形成し、 $E_{11,11,11}$  は別の祭りでイナンナ神が対象になると考えられるのであります。（注3）

### 三 ダガン神への奉納

ダガン神との関わりの問題に移ります。ウル第三王朝時代のシュメールにおけるダガン神崇拜の形跡はブズリシュ・ダガン（ドレヘム）という地名に窺えます。ここから出土したドレヘム文書によると、シュルギ治世という早い時期には、ペラトスフニル神などアツカド語名の神々に王妃が奉納しており、北の影響が窺えます。しかし、これは次のアマルシン治世に史料から確認できなくなります。それ以上に注目されることがあります。ドレヘム文書はニップルの

エンリル神を中心にしたシュメールの神々への奉納を記録するにも拘らず、シリア方面において圧倒的な信仰を集めるダガン神に言及することが大変に少ないという事実であります。もちろん主要なエンリル神殿などに合祀されてはいません。私がドレヘム文書中に見いだしたダガン神の用例は八例のみであります。

ダガン神への言及はアマルシン八年という治世も末の「ダガン神（への奉納）王妃のために」が最初であり、以後シュシン治世末年の九年まで確認されます。シュルギやアマルシン治世のほとんどのダガン神への奉納記事がないという时期的な偏りが一つの特色であります。先に述べた、ウナアの祭りへの言及と同じような史料への出方なのであり、それよりも遅くなります。第二の特色として言えることは、ドレヘム文書の八例中五例が、「ババティの家のダガン神」とか、先に示した例やアビシムティが奉納に際してのギル職を努めたなど、アビシムティと彼女の兄弟であるババティに関連することです。それをどのように説明もしくは解釈できるのか、確証がありませんが、ひとつの推定は可能であります。

つまり、彼女が馴れ親しんだ西方のダガン信仰をシュメールに導入したという推定であります。これはアビシムティが西方出自であったという推定になる訳ですが、それを補強するものとして、ハブリトゥム神への奉納があります。この神はティグリス川に注ぐハブル川を神格化したものとされています。この神がドレヘム文書に現われる最初の例はシュシン一年で、ダガン神の導入と同時期であります。シュシン治世の最後まで例をみます。これはアビシムティの活躍時期にあたります。この時期も重要ですが、さらに、シュシン一年という最も早い時期の記録において「シガン市のハブル神」と

地名が付記され限定されていることが注目されます。シガンはアツシリア時代のシカーニのことであり、ハブル川上流域に位置するとされています。（注4）このあたりが、アビシムティ、ババティ姉弟の故郷であった可能性があるのであります。

#### 四 イナンナ神と聖婚儀式

以上述べたごとく、アビシムティは、何かしらの西方的宗教儀礼を導入したと思われます。つまり、ウナア祭からイナンナ神に関係するであろうこと、ダガン神への奉納から西方の神を崇拝しその儀式体系に馴染んでいたであろうことが、理解されるのであります。加えて、聖婚の儀式に関連するとされます文学の一つラブソングが（注5）、シュシンを主人公にして書かれ始めることと、その中にアビシムティが現われること、この二点からアビシムティとイナンナ神の聖婚儀式との繋がりが推定できるように思われるのであります。

ウル第三王朝の前半に統治したシュルギ、アマルシンは、彼らの王碑文や王讃歌によれば、イナンナ神を戦闘の神として認識しています。これは、初期王朝時代からの伝統的な認識であり、アツカド王朝のナラムシンもその中に入ります。

それに対して、ウル第三王朝時代のシュシン以降、イシン・ラルサ時代を通じて聖婚の儀式を念頭においた豊饒・愛の神としてのイナンナ神が強調されるようになります。こうした傾向が確認されるのであります。イナンナ神の性格変更には、なお検討を要する問題が多々あると思われ、それは今後の課題として残し、ここでは推

定を述べるに留めておきますが、この推定によれば、まさしく戦國の神から愛と豊饒の神へ転換がアビシムティの活躍時期に重なるのであります。

シュシンはアマルシンから王権を篡奪したという推定がなされる場合があります。シュシンが篡奪者かどうか確証はありませんが、アマルシンとシュシンの間に政治的混乱があつたことはウンマ文書からみて正しいと思われます。この混乱にアビシムティが深く関与し、彼女が持つセム系の神の導入が何らかの作用を及ぼしたと考えられるのであります。

## 五 シュシン治世の変化

既に論文として発表してありますが、(注6)シュシン四年に貢納制度の改革が、軍事的契機でもって行なわれました。それと関連してか、五味さんが見いだしたドレヘム暦の改訂もあります。このように、シュシン治世には、いくつかの改革があつたと思われます。これを軍事改革、宗教的祭儀改革、行政改革の三分類に分けて考察すべきかと思われまゝ。グナマダの創設は軍事改革の一つと見做し得るでありましょう。祭儀の改革の代表として、聖婚の儀式を挙げることが可能でしょう。最後の行政改革には、大江さんが研究された裁判制度の変化を含めてもよいのではないのでしょうか。さらに、ラガシム市を根拠地としたスツカルマフのイルナンナの活躍というのも、シュシン治世における各種の改革というコンテキストの中で考える必要があると思われまゝ。これらはすべて今後の研究に待たねばなりません。

\* 本稿は、第二七回シュメール研究会(一九九〇年十二月二十一日)で「*u<sub>4</sub>-na-a*」と題して発表した原稿に加筆したものである。ただし、シュメール語史料の出典等はすべて割愛した。

## 注

注1 D.O. Edzard, et al, *Götter und Mythen im vorderen Orient* (Wörterbuch der Mythologie, Band 1), Stuttgart 1965, 49-50, 276-278.

G.Pettinato & H.Waetzoldt, *Dagan in Ebla und Mesopotamien nach den Texten aus dem 3. Jahrtausend, Orientalia* 54, 1-2 (1985) 248-249.

注2 T. Jacobsen, *The reign of Ibši-Suen*, JCS 7 (1957) 45-46 (=ITT 182-183)

注3 A.Archi - F.Pomponio, *Testi Cuneiformi Neo-Sumerici da Drehem*, Milano 1980, p.134 22同様の指摘がある。ただし、ウナアの祭りがイナンナ神に関わることは述べていない。

注4 D.O. Edzard und G. Farber, *Répertoire Géographique des Textes Cuneiformes*, Band 2: *Die Orts- und Gewässernamen der 3. Dynastie von Ur*, Wiesbaden 1974, p.266.

注5 S.N.クレマー(小川英雄・森雅子訳)『聖婚——古代シュメールの信仰・神話・儀礼——』新地書房 一九八九年

注① T. Maeda, *Bringing (mu-tum) livestock and the Puzuris*  
- *Dagan organization in the Ur III Dynasty*, *Acta*  
*Sumerologica* 11 (1989), 69-111

前田徹 「ウル第三王朝時代の *gi-na-ma-da*」『オリエント』三  
三巻一号、一九九〇年、八〇—九五頁

## 古代ローマの女性

小林 雅夫

西洋古代史研究も、最近の歴史学界の一般的動向を反映して、従来からの伝統的な研究課題とは異なる課題に注目する新しい傾向をみせている。そもそも古代社会の研究方法としては二つの方向がある。(一)は中世・ルネサンス期との比較から類推する方法で、人口動態学やアリエス説などの利用がある。(二)は現代の未開社会との比較から類推する方法で、文化人類学、医療人類学などの利用がある。

《人口問題》歴史上国家権力はしばしば人口問題に関心を示してきた。人口過剰による飢餓を防ぐことが重要な課題だった古代社会においては、一般的に公権力の関心事は人口増加を抑制することであつたはずだ。だから、そうした社会で公権力が人口問題に干渉し、

人口増加を奨励した場合には、その目的は一般に兵士の確保、支配階級の人材確保および支配階級の増加による富の分散化(権力者のライバルの弱体化)などであつたと推測される。

ところで、ローマ帝国下の人口現象は以前から歴史家たちの間で議論されてきた問題であるが、人口抑制が一般的だった古代社会においてわざわざ人口増加が奨励された背景には、人口現象が無視できない状態にあるとの厳しい現実認識があつた。人口過剰を恐れ、人口抑制が求められる理由としては、(一)経済的要因(貧困、食料不足)(二)社会的差別(性差別、女児殺害)(三)豊かさへの願望、女性の意識変化(出産・育児に対する嫌悪)などが考えられる。

《アウグストウスの婚姻法》人口増加を目的とした公権力の干渉の事例の一つとみられているのが、紀元前一八年に制定された法律(*lex Julia de maritandis ordinibus*)と紀元後九年に制定された法律(*lex Papia Poppaea*)から成るアウグストウスの婚姻法である。

この婚姻法は「人口増殖のために婚姻を奨励しさらに強制する規定と不純な分子を排斥するために婚姻を制限する規定とに分かれており、「両法は婚姻適齢期すなわち二五歳から六〇歳までの男子と二〇歳から五〇歳までの女子はすべて結婚すべきものとの建て前を取り、結婚して相手方の死亡または離婚により独身となった者も再婚すべきものとし、ただユリア法は寡婦のためには一年、離婚した者のためには六ヶ月、パピア法は二年および一年六ヶ月の再婚猶予期間を規定した。規定に反する独身者は、相続開始後一〇〇日以内に婚姻を締結せぬ限りは相続財産および遺贈を取得できない。

——中略——婚姻を締結しても子のない者は特定の不利益を受ける。例えば、無子者は死因処分によつて半額だけ取得できるに止まり、無子の夫婦は相互に他の死因処分により十分の一の額だけ取得できるに過ぎない。これに対して、生来の自由人のときは三人以上、被解放自由人のときは四人以上の子をもつ者は、各種の方面ことに官吏となるについて特権を与えられ、各種の公義務ことに後見人となる義務を免れることを許される。——中略——ローマ市民ことにその中心をなし支配階級を形成すべき元老院議員およびその階級から不純な分子を排除するためには、法は、元老院議員およびその曾孫に至るまでの子孫と被解放自由人・俳優またはその子との婚姻を禁じ、生来自由人と売春婦・淫事媒介婦・刑を受けた女・姦通した女との婚姻を禁じた。規定に反する婚姻は無効とされたのではなく、婚姻当事者は独身者および無子者に加えられる不利益を免れ得ぬものとされた」（船田享一著『ローマ法 第四巻』、岩波書店 六五—六七頁）。

この有名な婚姻法の目的が、人口減少を逆転させるための人口増加をめざした出生率の向上であり、その背景には人口減少をもたらした当時の支配階級の人口抑制、「小さ過ぎる家族」の選択があった。そして、アウグストウスの政策が失敗したことはその後のローマの歴史がはつきりと示している。それゆえ、本研究ではこの婚姻法を産みだした当時の人口減少の社会状況を近年の家族研究・女性史研究の成果を考慮して検討した。

《大家族と小家族》前近代社会に対する理解として「大家族」から「小家族」への移行という見解がかつては支配的だった。しかし、大家族と貧困との関係については、現代の第三世界の研究からの類

推により大いに疑問視されている。むしろ農家の場合は大家族の力が小家族より生産性が高く、大家族は経済的根拠をもっており、飢餓に対する唯一の予防策である。つまり、第三世界の人々は貧しいがゆえに大家族になるのである。人口過剰に苦しむ発展途上国で産児制限が受け入れられないのは、教育の欠如による無知だけが原因ではない。birth controlは豊かな者が選択できる方法であり、貧しい者には選択の自由はない。人口爆発の危険を避けるむずかしさはここにある。

近年の家族研究も明らかにしているように、家族の規模を制限する傾向は時代を超えて、社会・経済的階層を超えて不変だった。子供の人数を制限しようとする動機は富裕層と貧困層とは異なるにしても、古代人は一貫して小家族を選択していた。allments（児童手当）は公的財政の負担となった。子供をもつことは重荷となり、子供の価値観が変わった。しかし、家族の規模を決定するのは私的決定事項であつて、公的決定事項ではなかった。それ故、アウグストウスの婚姻法の背景には、ローマ人が余りにも「小さ過ぎる家族」が引き起こす問題を認めていたことであろう。つまり、かれらを悩ませていたのは、（一）上層階級の出生率の低下による支配階級の人材不足、（二）軍隊の兵員不足の問題であつたろう。

《家族計画》一般的に見て、医学的未発達あるいは技術の未発達な社会、そして医学による生命操作がおよばない社会では、出生率と死亡率はいずれも増加し、自然条件が誕生と死を支配し、人口数を決定していた。生命への干渉が可能となるにつれ、生命の浪費がなくなり、出産が減少し、寿命が長くなる。しかし、「小さ過ぎる家族」、子減らしの道を選択する方法としては（一）避妊（二）堕胎

(三) 嬰兒殺害 (四) 嬰兒遺棄がある。ところで、古代人は早くから家畜の妊娠と接していたこともあり、妊娠についての医学的理解はかなり正確だった。胎児は性交の結果であることはつきり理解されていた。プルタルコスによると、母胎の保護のために堕胎の危険より嬰兒殺しの方が選択され易かったと思われる。この理由としては、(一) 医学の未発達 (二) 胎児あるいは嬰兒の生命軽視が考えられるが、古代人も堕胎は胎児に「生命がない」場合に限り、堕胎を避けようとしていたことからみて、堕胎概念が現代とは大きく異なっていた。古代人にとつて、「動き」とは胎児が完全にその身体を形成し、動くという事実によつており、この境界以前には胎児は「生命なきもの」、物体、生産物、精液でしかない。古代人の医者の中には、胎児とは生命のある胎児のみであり、胎児の動きを母親が感じたとき生命のある胎児と認められる。つまり、古代人にとつての避妊には、初期流産つまり堕胎が含まれていた。それゆえ、生命のある胎児とは認めなかった子を流産することは避妊であるから、何も罪の意識は感じなかった。ソラノスに代表されるような産婦人科学書には数多くの避妊方法が記述されており、その多くが現代医学からみたら堕胎の記述であるのはこの胎児観の違いにある。ローマの女性がかなり避妊・堕胎を試みていたと理解したにしても当時の医学水準の低さは妊娠・出産の危険を防ぐ効果はほとんど期待できなかったろう。その結果は嬰兒殺しと嬰兒遺棄となつたであらう。

《産まない自由・育てない自由》避妊・堕胎・嬰兒殺害・嬰兒遺棄という子供減らしの方法がどの程度実践されたかについては、さまざまな意見があるが、所詮推測の域を出ない。しかし、近年の人口

動態学の成果は、古代においても意図的な人口調整がかなり広く普及していたことを暗示している。いずれにしても、効果に疑問があつたにしろ、ローマの女性たちがこのような人口調整の方法を実践していた事実を疑う必要はない。このことは少なからざる女性たちが子供を重荷と感じ、何のために（誰のために）産むのか？に疑問を持ち、産まない自由、育てない自由を選択したことを意味する。性的快楽は満たしたいが、妊娠・出産は避けたいと望む女性、つまり性的快楽と生殖の分離を求める女性たちが登場したことである。このように子供を産む道具でしかなつたギリシアの女性とは全く異なる新しいタイプの女性がローマ帝政初期に登場したのである。そして、歴史上ローマの女性が注目を集めるのはこのためである。ところで、このようなローマの女性の登場を可能にした原因は、ローマ女性史・家族史が明らかにしてきたように、ローマ人の結婚、相続にある。ローマの女性は結婚後も夫の支配下に入らず、実家の父親の家長権に従う道を選び、父の死後は均分相続によりかなりの資産を相続し、離婚が容易であることから夫と離婚することができた。このように政治的自由はないものの、社会的自由と経済力に恵まれ、愛人にも不自由しない上層階級の活発な女性たちが活躍したローマ帝政期は、まさに世界女性史の一大転換期だったのである。

古ゲルマン社会における女の地位

C・タキトウス『ゲルマーニア』第八章によれば、ゲルマン人は、女には神聖で、予言者のなものが内在すると考えた。したがって彼らは、女の言をしりぞけたり、あるいは、その答を軽んじたりすることをしない。これだけでも、古ゲルマン社会（J・カエサルとC・タキトウスの時代、すなわち紀元前後一世紀ごろの文献史料が現われてくる時代の社会）において、女が優遇されていることがわかる。

たとえば、ローマ皇帝ウエスパシアヌス（Vespasianus）の治世（六九—七九）に、ゲルマーニアの多くのものたちから長いあいだ、神のように崇められたウエレダ（Veleda）という女予言者のことが、あまねく知られている。ブルクテリー族出身のウエレダが尊崇された一要因は、彼女が紀元七〇年に、ゲルマンの一部バターウィー（Batavi）を中心とする反乱軍とローマ軍とのトリアーにおける衝突にさいして、ローマ軍の敗戦を予言して適中したためだった。ウエレダは、常にリップペ河畔の塔上に住み、ここより身内の一人を通じて予言を伝え、命令を下していた。この反乱軍の指揮者、バターウィー族の首領ユーリウス・キーウィーリス（Julius Civilis）とともにローマにたいする反乱軍を指揮し、キーウィーリスをして、むしろローマ側に傾いていたケルンの住民を反乱軍に加わらしめたこともある、といわれる。

しかもゲルマン人は、それ以前にも、アウリーニア（Aurinia）

およびその他、いくにんもの女たちを崇拜したが、これは決して媚びのためでも、また強いて女を女神にしようとするものでもない。ローマにおいて、皇帝カリグラ（Caligula）がその妹ドルーシッラ（Drusilla）に、またネロ（Nero）がその妻ポッパエア・サビーナ（Poppaea Sabina）にたいしておこなったように、けだしこれは女をあえて神格化したものであつて、おのずから神として崇められたものではなかった。

しかし、もちろんこれは、特定の女が神格化して崇められたものであり、女性一般の地位が神格化していて神と同一の地平にあることを示唆するものではない。このことを叙述している『ゲルマーニア』第八章の前半の叙述するところによると、女の地位は、少なくとも男の地位より低くはなく、むしろ観念的であるにせよ、ほぼ男と同じだったと考えてよいだろう。民族移動期の家財、家族、隸属民を同伴するゲルマン移動集団のように、戦闘状態にあつては、男の戦士はすべて戦列に加わり、女は後方にあつて戦士たちを支援した。戦敗、そして捕虜となる運命が差し迫っている場合には、ゲルマン人は自身が捕虜となることより、その女が捕虜となることをはるかにたえがたいばかりに恐れた。もし身分の高い少女たちが人質のうちに加わる場合には、ゲルマンの勝者はその小部族国家ないし小部族集団（civitas）をもつとも有効に束縛することができた。

このことは上述の考えを裏書するものと考えうるだろう。

ところで、『ゲルマーニア』第一章によると、ゲルマン人の結婚形態は一般に一夫一婦であつた。タキトウスがこの形態を特に詳述しているのは、ローマ世界での婚姻の乱れにたいして警告を発するためであつたと考えられる。ゲルマン世界でも、きわめて少数の



人びと（貴族）が、単に門地が高いということだけで、一夫多妻が容認されていた。つまり、何回も結婚をかさねることがみとめられていたわけである。このような多妻制が貴族・豪族だけにゆるされた特権だとすれば、一夫一婦制を厳守したのは、総じて諸多の蛮族中、ゲルマン人だけだったといわれる。しかし、多妻を擁した貴族がきわめて少数であつたか否かを断定するためには、まずもつてゲルマンの貴族とは何かというアポリアを解き明かさねばならないだろう。

なお、恐らく多くの民族の慣例とは違つて、ゲルマン人のあいだでは、持参品は妻が夫にもたらすのではなく、夫が妻に贈るのである。このときには、妻の両親や近親が立ち会つてそれを検する。贈物は、女のもつとも喜びとするものを選ぶのではなく、単にいく頭かの牛、および轡をはめられた一頭の馬、それに一口のフラメア（Franga、細く短い鉄の刃の手槍）と剣とを添えた一つの桶だった。この贈物にたいして妻が迎えられ、妻はそれにたいして、またみずから、武器のうちの一の刀剣を夫にもたらす。ゲルマン古代では、階層としての自由人は単に農民とか戦士とかに分かれず、兵農未分であつたので、同一人が平時には農民、戦時には戦士として行動したことを銘記すべきであらう。いずれにせよこの夫へ刀剣を贈るという一種のセレモニが、夫妻の最も堅固な絆であつた。これが、ゲルマン人のモラルであり、簡単に離婚や不倫をしなかつた大きな理由であらう。妻が、夫の武勇への念慮、その戦場での苦難に、みずからは無縁の存在とは考えないように、結婚のはじめのこれらのしるしによつて、自身は夫の辛苦と危難の友として嫁ぎ、平和において、また戦時において、同じことをともに忍び、ともに

おこなおうとするものであることを、想起せしめられるわけである。ここでも、ゲルマン社会の一夫一婦という慣習を述べながら、タキトゥスが、こうした婚姻形態の乱れたローマ社会と対比してこれを特筆することによつて、暗にローマ人の婚姻の乱れにたいして有効な警世になると確信していると考えられよう。同時にこのような慣習は、ゲルマン古代の女の地位が男とほぼ同等であつたことを立証しているとみてよいだろう。

ついで、『ゲルマーニア』第十九章によると、ゲルマンの婦人たちは、貞潔をまもつて一生をすごし、ローマ世界におけるように、見世物の誘惑、宴席の刺激に損なわれることがない。ゲルマン世界では一夫一婦が厳肅にまもられている。これは、もちろん権力による強制ではなく、民衆の自発的な行為としてまもられたのである。この一文は、男と女は、総じて人権も社会的地位も同等であつたことを裏書きしている、とみてよいだろう。男女差があれば、こうしたことはまもられないはずである。

また『ゲルマーニア』第十九章によると、ゲルマン人のあいだでは姦通がきわめて少ないとある。妻の姦通が発覚した場合には、処罰は夫に一任され、夫は妻の髪を切り去り、これを裸にし、近親の目前で、家より逐い出し、鞭を揮つて村中を追いまわす。つまり公にされた貞操には、なんの容赦もないからである。したがつて、地位が男女の間で平等だということは、夫のある女が貞操を破つた場合には、当の女が厳罰に処せられるということによつても裏づけられるだろう。容貌がよくても、年齢が若くても、大きな資産をもつてしても、も早夫を見出すことはおそろくできないだろう。

当然のことながら、ゲルマン諸族の習俗として、ただ処女だけが

結婚し、妻となる望みの誓いは、ただ一度だけにかぎられる。こうして彼女たちは、ただ一人の夫を享けること、あたかもおのれが、ただ一つの体、ただ一つの生を受けるが、したがって婿を超える考えをおこさず、欲望を伸ばさず、いわば彼女たちの愛するものは、婚嫁よりも、まさにおのれの夫たるひとであるかのごとくである。

すなわち、処女だけに結婚がゆるされ、妻となることは、生涯にただ一度だけにかぎられる。したがって、慢性的戦争状態にあったゲルマン古代においては、寡婦が多かったということは事実だったであろう。寡婦は王政であれば王権の保護の対象となった。ゲルマン古代では、王政をとる部族の方が首長制をとる部族よりはるかに多かつただけに、王権はかなり多くの寡婦を保護しなくてはならなかっただろう。またこの時代には、夫が戦争で遠征に加わり、いくにちも家をあげれば、妻が家事、家畜の飼育、農耕など一切の責任をもたなければならなかった。家庭内分業といえようか。兄弟および隷属民も戦争に参加すれば、妻は子供や老人とともに家事および農牧を一切切り盛りする責任があつた。家事に追われて農牧経営をゆるがせにすれば、たちどころに家畜とりわけ牛や馬は衰弱し、畑は荒廃するだろう。社会的地位が男女平等だということは、分業で責任を分有する男と同様女もおのずから自分の任務を全うしなければならぬということである。当然のことながら、当時性による家族内分業がすすんでいたといふべきだろう。奴隷が物権でなく人権をもっていたということは、男女ともに自由人までの社会的地位上昇の道が開かれていたということもできよう。

ところで、ゲルマン人のあいだでは、相続権は平等ではなかった。とくに不動産は長子が単独に相続する。すなわち、これは一子ない

し長子もしくは単独相続制と呼ばれる。婦人相続権は、メロヴィング朝のヒルペリヒ王のときにみとめられる。同時に分割相続も慣習化する。女も不動産相続にあずかり、土地を分割相続して土地所有の零細化を招くことになる。したがって、ゲルマン古代にあつては女は男とまったくおなじ権利を分有したとはいえない。男の場合にも長子相続という大きな不公平があるので、相続関係のみから社会的地位に言及することは適當だとはいえない。しかし、土地占拠の実状を考えると、占拠した土地は地位に応じて分配される。したがって、これが耕地や牧草地であれば、はじめから土地の個別所有権が存在したのではなく、存在したのは個別利益権であつた。しかるに、定住生活がすすむにつれて、個別所有権は家屋や屋敷地にはじまり、やがて耕地にもその個別所有権が成立している。当時は経済生活の重点は、牧畜にあつて、農業は副次的なものでしかなかった。そこで、農業は土地所有を基軸として考える必要はないだろう。そうだとすれば、ゲルマン古代における女の社会的地位や境遇は総じて、男と異ならなかったといえよう。

#### 参考文献

- R. Much, *Die Germania des Tacitus*, 3. Aufl., Heidelberg 1967.  
B. Krüger (Leit.), *Die Germanen, ein Handbuch*, 2 Bde., Bd. 1, 5. Aufl., Berlin 1986, Bd. 2, Berlin 1983.

H・ミッタイスリールベリッヒ、世良晃志郎訳『ドイツ法制史概説』改訂版、創文社、一九七一年。

## 西欧中世における女性の社会的地位

野口洋二

西欧中世における女性の社会的地位は、これ迄一般に低い評価を受けてきた。そしてそれには主として二つの理由があった。一つは教会の説いた女性観である。古代教会では、聖書や使徒の教えにもとづき、男性より低い存在、男性に従属すべきものとする女性観が生まれた。さらに、その後禁欲的理想が社会に浸透するにつれて、女性を最高の誘惑者、救済を妨げる最大の障害とみなす観念が生じた。これらの観念は、教会の統一の見解となつたわけではないが、中世をつうじて社会の思考や道徳に大きな影響を及ぼし、それが近代以降の、中世の女性に対する見方にも投影されてきたのである。いま一つの理由は、封建的貴族階層の女性に対する近代の理解にある。中世社会は男性中心の社会で、中世の女性は家庭内をのぞけば活動する余地がなかった。封建制は女性を家の利害に従属させ、女

性は一個の人間として認められていなかった、と考えられてきたからである。

しかし、近年の諸研究は、これ迄あまり注目されてこなかった女性の問題を精力的に取り上げ、女性の社会的政治的活動の実態を明らかにしつつある。なかでも注目されることの一つは、中世前半期の女性が果たした社会的政治的役割の重要性が指摘されていることであろう。確かに、この時代には王侯・貴族の女性に関する記録が残されているにすぎず、近年の研究もこれら一部の女性を対象としている。しかし、これらの女性たちの事例からも従来の理解は変えざるをえなくなっているように思われる。

そこでここでは、対象を中世前半期（五〇〇―一二〇〇年）に限定し、限られた範囲ではあるが、女性の経済的基盤、社会的地位の変遷を概観するとともに、幾つかの事例をあげることによつて、この時期の女性の社会的活動について若干考えてみたいと思う。

ところで、女性の社会的地位を考える場合、まず問題となるのは、その経済的基盤であろう。それなくしては社会的活動もありえないからである。この時期に女性が財産を得る手段としては、次の四つの方法があつた。相続、結婚する際の持参金、新郎からの婚前の贈物、および結婚の翌朝に与えられる贈物(Morgengabe)である。

まず相続についてであるが、ローマ帝国では女性にも相続権を認めていたのにたいし、ゲルマン人の女性は初期の段階では原則的に相続から排除されていた。これは、ブルグント、アレマン、バイエルン、リプアリアの各部族法典が、息子がいない場合にのみ、またザクセン部族法典が、息子も父の兄弟もない場合にのみ、娘に相続を認めていることから明らかである。しかし、ランゴバルト法は、

父の財産の三分の一を娘に与えることを認め、ゲルマン法のなかでもっともローマ法の影響を受けた西ゴート法典は、娘にも相続権を認めていた。ガンスホフが指摘しているように、制限されていたのはローマ法の影響をもっとも受けなかった地域であつた。しかも、サリカ法の発展から、これらの規制は緩和される傾向にあつたことがわかる。五世紀末に書かれたサリカ法の最古の版では女性を土地(terra salica)の相続から完全に排除しているが(第五章、五)、六世紀末と七世紀の改定版ではその相続が娘にも認められているからである。従つて、ゲルマン人の女性もじよよにかなりの財産をもつことが可能となつたと考えてよい。

次に、持参金であるが、ゲルマンの慣習では父親が持参金を与える義務はなかつた。しかしゲルマン人の間でも、ローマの慣行に従つて次第にこの慣習が普及したようである。また、父に代わつて母が自分の財産を与えた場合も伝えられている(Gregori, Turonensis, *historiarum libri* X, 6, 45)。もっとも、持参金について伝えられているのは王女の場合がほとんどであるが、こうした方法で女性が資産を持ちえた可能性も無視できない。

また、結婚の際に新郎から与えられる贈物(*bridegift*)については、従来売買婚を示すものと理解され、新婦の家族に対して支払われたと考えられてきた。しかしこの贈物は、サリカ法が新郎に対し花嫁の父か後見人に一ソリドウスと一デナリウスの名目的な金を支払うよう命じているように、象徴的な意味をもつものとなり、しかもその上、花嫁の家族にではなく、花嫁自身にその一部、あるいは全額が与えられるようになった。例えば、六世紀初頭のブルグント法では、花嫁がその三分の一を受け取り、残りを父か近親者が受け

取るよう定めているし、西ゴート、バイエルン、アレマンの各部族法典では、花嫁が全額を受け取るよう規定している。また、ランゴバルト法では、七世紀のロタールの規定は父親がこれを受け取るとしているが、八世紀のリウトブランドの規定では全額花嫁が受け取り、家族は単に名目的な補償のみを受け取るよう定めている。従つて、この贈物は次第に結婚した女性に贈られるようになったことがわかる。

これに加えて花嫁は、結婚の翌朝に *Morgengabe* を受けた。これは一般に不動産であつたが、彼女はその用益権あるいは完全な所有権をもつた。例えばメロヴィング時代、チルペリック一世は、五五六―七年にガルスヴィタと結婚した時、リモージュ、ボルドー、カオールなど五つの都市を彼女に与えている。しかもこの財産は、ガルスヴィタの死後、夫の手には戻らず彼女の姉妹のものとなつた。もっとも、後にこの贈物は、その量が制限された。例えば、八世紀のランゴバルド法は、この贈物が夫の財産の四分の一を超えぬよう命じ、貴族身分に属する夫には三〇〇ソリドウス以上与えることを禁止している。

いずれにせよ、八世紀半ば、カロリング時代にはすでに、売買婚の觀念と女性の相続不能はほとんど消滅し、結婚した女性は、以上のさまざまな方法で、自己の所領や動産をもち、それをつうじて社会的政治的活動を行うことができるようになっていたのである。

確かに理論上、カロリング時代の女性の活動は「家政」の域を出るものではなかつた。だが、この時代には公権と私権との区別がなかつたから、女性の活動にはなんらの制限もなかつたといつてよい。特に王妃や貴族の妻の場合はそうであつた。例えば、カロリング朝

を建てた。ピピンの妻ベルタは、ピピンの死後にかんがりの政治的権力を行使している。また、カール大帝が、「御領地令」(Capitulare de villis, 16)で、王妃に王領の管理について大きな権限を与えていることはよく知られている。リヨンのアゴバルドは、ルイ敬虔王を「宮殿と王国を統治する上で彼を助けることのできる妻をもつていない」と非難している(Migne, PL, civ, 310.)、こうした言葉からも、王妃がいかに重要な役割を果たしていたかが窺えよう。しかも、ルイの治世以後帝国はしばしば政治的混乱に見舞われ、女性が家政を守ることは益々重大な意味をもった。夫が不在の時には、妻がすべての問題を解決し、城を守り、軍隊を指揮しなければならなかったからである。

しかし、女性の社会的政治的活動がより活発に行われるようになったのは、カロリング帝国が解体し、帝国の諸権限が封として貴族の手に移行してからであった。八七七年にシャルル禿頭王はキエルズイの勅令で封土の世襲を認めたが、その結果、男子相続人がいない場合は、封土から生じる収入を娘が相続することとなった。さらに、貴族たちは自主地をもち、あるいは自主地への支配を拡大したが、これら自主地の相続にはいかなる制限も加えられなかった。つまり、女性はこうして広大な所領を手に入れ、社会的政治的活動に加わっていったのである。もちろん、女性は夫に財産の管理を委ねていた場合が多い。しかし、一一世紀のトスカナのマティルダのように、夫たちを排除し、それを自己の支配下においた場合も少なくなかった。また、一二世紀のアキテーヌのエレアノールの場合、その所領は結婚とともに移動し、まずフランス王領、ついでイングランド王領となったが、離婚した後は独立した所領となり、最後には

彼女の二番目の息子の手に帰している。しかもこうした事例は、イングランド、フランス、ベルギーにおいて、王妃や上級貴族の妻のみでなく、より有力でない女性たちについても認められることが、近年、マルク・ブロックやジョルジュ・デュビーによつて明らかにされている。

そればかりではない。こうした女性の活動は教会の非難からも窺い知ることができる。すでに八九五年に、ナントの教会会議で司教たちは「神と人間の法に反して、……女性たちが王国の経営や公共の利益を攪乱させている」と非難している(c. 19. Mansi, 174-184, 171)。しかし、この種の非難はまったく効果がなかった。十世紀に、司教たちは教会守護職の相続を女性にも認めざるをえなくなるからである。しかも、この世紀の前半には、ヴェルチェリのアトーが批判しているように(Epistolae, Migne, PL, cxxxiv, 115-9)、聖職者の妻たちが教会財産を自由にしていた。またこの時期、教皇座がテオドラとその娘マロツィアに支配されていたことはよく知られている。

しかしながら、公的権力の再編成が開始された一一―一二世紀に、女性の活動は大きく制約されるにいたる。帝国では、叙任権闘争期に、貴族権力が台頭するとともに、個人的基盤に基づく統治が後退し、統治機構が整備されるに従つて、王妃の権力は極度に低下した。こうした変化は、一二世紀をつうじてイングランドやフランスでもみられた。またこの時期には教会改革が進行し、教会から貴族権力を、従つて女性の活動を排除しようとする動きも現れた。一方、貴族層においても、封の相続から女性を排除するコンラート二世の規定(Constitutio de feudis, 1037)は必ずしも守られなかったけれど

も、一二世紀半ば以降ドイツでは女性が封を相続するケースが稀となった。その上この時期には、西欧全域で支配者の交代や騎士の出現がみられたが、新たに権力を握った支配者たちは、所領の分散浸食を避けるためにその防衛に努めた。長子相続制や家産的財産不分割の原則の確立はかかる努力の現れに他ならなかったが、こうした努力は貴族の娘たちの権利を著しく減少させた。その結果、女性の財産は主として結婚時に与えられる持参金に限定されることとなり、それと同時に、女性は公的な社会的政治的領域から排除されていったのである。

以上、中世前半期の支配階層の女性について若干述べたが、これらの考察からも従来この時期の女性に対する評価は修正されねばならないことが理解できよう。

#### 参考文献

O. Stenton, *The English Women in History* (1957) / D. Baker (ed.), *Medieval Women* (1958) / S. F. Wemple, *Women in Frankish Society* (1981) / S. Shaher, *The Fourth Estate* (1983) / A. M. Lucas, *Women in the Middle Ages* (1983) / J. Kirsher & J. F. Wemple (ed.), *Women of the Medieval World* (1985) / Hanawalt (ed.), *Women and Work in Preindustrial Europe* (1986) / M. W. Labarge, *Women in Medieval Life* (1986) / M. Drler & M. Kowaleski, *Women and Power in the Middle Ages* (1988) / J. T. Rosenthal (ed.), *Medieval Women and Sources of Medieval History* (1990) / G. Duby et M. Perrot (ed.), *Histoire des femmes, le moyen âge* (1991) / D. Herlihy, "Land, Family and

Women in Continental Europe, 701-1200" *Traditio*, 18 (1962)

#### 中世後期のポーランドにおける理想的な女性像

—ドゥウーゴシュが描くヤドヴィーガ像—

井内敏夫

リトヴァ大公ヤギエウオは、一三八六年、ポーランド王国の相続権者であり、統治権をもつヤドヴィーガと結婚することによってポーランド王となった。そのヤギエウオは、結局、ヤドヴィーガの外に、アンナ・ツイレイスカ、エリジビエータ・グラノフスカ、キエフ公の娘ソフィアの四人の女性を妃とすることになる。一方、一五世紀後半に生きたヤン・ドゥウーゴシュは、最初の総合的なポーランド史ともいえる大部の年代記を残した聖職者である。そのドゥウーゴシュはこの四人の王妃のうちで、ヤドヴィーガを時に「聖なる女性」と呼びながら、ただひとり性格にまで踏み込んで描写している。そこで、ドゥウーゴシュの描くヤドヴィーガ像を検討することで本課題へのアクセスの一助としたい。

ヤドヴィーガは、ハンガリーとポーランドの二つの国の国王であ

つたアンジュー家のルードヴィクとボスニアの大守ステファン・コントローマーニツの娘エリジビエータとの四女、末娘として生まれた。生年は一三七四年と推定される。四人の娘のうち二人は幼くして亡くなり、父ルードヴィクが死去する一三八二年まで生きながらえていたのはマリアとヤドヴィーガの二人だけであつた。すでに一三七四年、ポーランドの諸身分はポラドルネ税の大幅な減額と引き換えにルードヴィクの娘たちを王国の相続権者と認めていた。したがって、ルードヴィクの後継者としての資格をもつたのはマリアとヤドヴィーガの二人であるが、ルードヴィク自身はブランデンブルク辺境伯シグスムントとすでに結婚していたマリアを両王国の継承者と考へていた。

この構想が崩れ、ヤドヴィーガがポーランド王位を継承した主たる理由は、ポーランドの諸身分が王国に常駐できる君主を求めたことにある。ルードヴィクの王朝合同時代にポーランド王国が輕視されたからである。独自の君主の擁立というこの方針はすでに一三八二年一〇月の政治集会で固まつていたが、ポーランド内部の対立やハンガリー側の逡巡、その外ヤドヴィーガがまだ幼かつたこともあり、彼女がクラクフに入つたのはようやく一三八四年一月一日であり、ルードヴィクの死から二年ほど経っていた。

こうして一〇才でポーランド女王として即位したヤドヴィーガは、一二才でリトヴァ大公ヤギエウオと結婚、そして一三九九年六月二日に女兒を出産したが、その子はまもなく死亡、また自らも初産から一ヶ月後の七月一七日、およそ二五年の短い生涯を終えた。ドゥウーゴシュは、前述のように、このヤドヴィーガを女性として、また統治者として非常な好意をもつて描いている。

一〇才のヤドヴィーガが壮麗な従者行列を従えて初めてクラクフ市に入城したとき、その歓迎ぶりを描くなかで、ドゥウーゴシュは次のように書いている。「一方、ポーランドの聖俗の貴顕たちは、彼女に絶大な好意と熱烈な愛情を注ぎ、自分たちが大の男であることを忘れ、かくも高貴で徳の高い女性に平身低頭することは恥辱にあらずと考へていたほどであつた」。また、結婚問題を後回しにしてさつそく塗油と戴冠式を挙行したことに触れて、このポーランド人の行為を「あたかも夫なしに、彼女自身で十分にポーランド王国を統治しうると見なしていたかのように」とドゥウーゴシュは評している。

実際ヤドヴィーガは単なる王妃ではなく、統治権をもつ女王として政治に直接携わつてゐる。ドゥウーゴシュがあげている女王の事績には、次のようなものがある。空位期以来続いているヴィエルコポルスカの内乱状態を夫とともに短期間で收拾したこと（一三八六年）。ヤギエウオに同行してリトヴァに赴き、リトヴァのキリスト教化に貢献したこと（一三八六―一八七年）。自ら軍を率いてガリツィアに出陣し、この地をハンガリーの統治から切り離してポーランド王国に再統合したこと（一三八七年）。ヤギエウオのいとこにあたるヴィトルドとヤギエウオの弟たちとの争いを調停し、リトヴァに安定をもたらしたこと（一三九二年）。ヴィトルドによる第二回のタタール遠征に反対し、多くのポーランド人騎士に参加を思いとどまらせ、彼らの命を救つたこと（一三九九年）。カジミエシ大王が創設したクラクフ大学の再建に尽力し、女王の死後これが実現したこと（一四〇〇年）。

またヤドヴィーガは側近の榮達にも意を注ぎ、並々ならぬ政治力

を兼備していたようだ。代表的な例としては、自分自身の書記官長であったピョートル・ヴィシを一九三二年にクラクフ司教に、女王の執事を務めたノーヴィ・ドウヴォールのドブログストを一九三四年ポズナン司教に、ついで一九三四年にはグニエズノ大司教に昇進させている。一九三九年にポズナン司教に叙任されたヴォイチエフ・ヤストシエンビエツも一九三四年以来女王の書記官長を務めていた。

ドウウーゴシユは、そのほか、キリスト教の強化に献身する女王の姿をも熱意を込めて描写している。この方面でのヤドヴィーガの最大の功績は、ヤギエウォとの結婚を最終的に受け入れてリトヴァにキリスト教をもたらしたことであるが、前述のリトヴァの洗礼に際しては、女王はヴィルノ司教座聖堂と七つの教区教会に祭祀用の備品と宝物を寄贈したという。これ以外の事績としてあげられているのは以下の四点である。クラクフ郊外のクレパシにスラヴ語典礼によるベネディクト派の聖十字架教会を建設し（一九三〇年）、さらに修道院の建設をも目指したこと。同じくクラクフ郊外のピアセクにカルメル派の聖処女マリア訪問教会と修道院とを建設したこと（一九三五年の項）。クラクフの司教座聖堂に一六名の詩篇詠唱団を組織したこと（一九三三年）。リトヴァのキリスト教化を推進する目的で、リトヴァ出身の学生のためにブラハ大学に学寮を設けたこと（一九三七年）。

こうしたヤドヴィーガをドウウーゴシユが好んで形容する言葉は、「敬虔な」、「信心深い」、「高潔な」といった形容詞であるが、「聖なる」という言葉もしばしば使用されている。しかも、「聖なる女性」という形容をドウウーゴシユは単なる美辞麗句として用い

るのではなく、そこには真摯な意味が込められている。年代記は、自分の生存中は残酷な戦争を控えるが、自分の死後には正當な神の審判に基づいて過酷な敗北を被るだろう、と貪欲なドイツ騎士団の指導者に対して喝破するヤドヴィーガの演説を紹介し、これを「天からの何らかの靈感を受けた聖なる女性」の言葉と評している。また、ヴィトルドによるタタール遠征の失敗を予言し、ポーランド人の参加を少数に押しとどめた女王の行為をもドウウーゴシユは「靈感」に基づくものと位置づけている。

もちろん、ドウウーゴシユが女王の言葉を天啓と評したのは、その後のタタールへの遠征軍の惨敗や一四一〇年のグルンヴァルドの戦いという史実が、女王の言葉の正しさを立証したからに外ならない。しかし、彼女には「聖なるもの」を感じさせる何かが備わっていたことは疑いない。当時の人々も、またドウウーゴシユ自身もヤドヴィーガによる奇跡すら信じていた。彼は書いている。「この希有なほどに信仰心の篤く、天の恵みを受けた女性の神聖さは、死後、骨と化して後に明白に証明された。今日でもそれは確認され続けており、臣民の多くの愛が冷める将来の世代においてもその証拠は見いだされるであろう。なぜなら、彼女の庇護と功績によつて死者は生命を蘇らせ、びつこは歩行能力を、盲目は視力を、おしは言葉を回復し、悪魔に憑かれた者は解放され、様々な病にかかり、衰弱した者はいろいろの種類の痛みのなかで健康と喜びとを取り戻している」。

ドウウーゴシユは決して無批判的な年代記者ではない。彼の年代記がポーランド最初の総合的な歴史書と評されているように、中世後期の教養ある高級聖職者としての倫理観と世界観がその著作の



下敷きとなつてゐる。彼はヤギエウオの三男にあたるカジミエシ四世の時代に活動した人物であるが、ヤギエウオ家の諸王に対して極めて批判的である。例えば彼は、ヤギエウオとヤドヴィーガの結婚によつてポーランド王国がリトヴァやジムジにキリスト教信仰を伝道するという「最大の光栄と榮譽」をえたことを認めながらも、両者の結婚自体には否定的な評価しか下していない。年代記は、ルドヴィクが生前に決めたオーストリア公ヴィルヘルムとの結婚に固守し、容易にポーランドの高官たちの説得に応じなかつたヤドヴィーガの姿勢に共感を寄せてゐるが、彼によれば、ポーランドはピラスト家の君主をヤドヴィーガの夫とし、自らの国王とすべきであつた。ヤギエウオとその後継者はポーランドよりもリトヴァの利益を優先し、また、ポーランドの貴族勢力を横暴かつ貪欲にさせたのもヤギエウオであつたというのである。ドウウーゴシユは、ヤギエウオをして、統治には向かず、狩猟に才能をもつ人物とまで酷評している。

そうしたドウウーゴシユの鋭い舌鋒はヤドヴィーガに対しても鈍つてはいない。一三九二年、クラクフ司教の通称短軀のヤンが死去したとき、クラクフ聖堂参事会は同参事会員のフミエーリクのシエチエーフを司教に選出した。しかし、ヤギエウオとヤドヴィーガの干渉で、結局教皇ボニファティウス九世の支持をえて、クラクフ司教に叙任されたのは、女王の書記官長でヴオツワフの聖堂参事会長、すなわち前述のピョートル・ヴィシであつた。この件でドウウーゴシユは俗権による司教選挙への干渉を明確に批判し、すでに選出されているシエチエーフが「不当に」排除されたと書いてゐる。

このようにヤドヴィーガは、ドウウーゴシユの価値観から見れば、

なんらの誤りをも犯さなかつた女性ではなかつた。また、ヤドヴィーガがヤギエウオとの結婚に抵抗した理由には、ヴィルヘルムとの婚姻の問題の外に、ヤギエウオには醜い痣があり、その所作振る舞いは平民のようとの噂を彼女が気にかけていたこともある。女王はその点を調べさせるために、ポーランドに入つたヤギエウオのもとに側近のひとり秘かに派遣し、噂を否定する報告を受けて少し安堵したという。この挿話も一〇才のヤドヴィーガのおしやまな乙女心を窺わせてほえましいが、決して彼女の「高潔さ」を引き立たせるものではない。しかし、それにもかかわらず、「聖なる女性」というドウウーゴシユの評価はいささかも揺らいではいない。なぜなのであろうか。どのような魅力や美徳が彼女には備わつていたのであろうか。

ヤドヴィーガが非常に美しい女性であつたことは何度も強調されている。ドウウーゴシユは、「当代、全世界でもヤドヴィーガほどに見目麗しき女性はいないと考えられていた」と述べることも、次のようにも書いてゐる。「彼女は、これまで決して見られなかつたような、大いなる、かつ目に焼き付くような美しさを天賦のものとして受け取つていた」。加えて、アンジュー家という名門王家の出であり、王侯の礼儀作法を弁え、高い教育を受けていたことはいうまでもない。だが、ドウウーゴシユはこう書いてゐる。「彼女が名譽ある地位を占めたのは、卓越した家柄ゆえというよりは、むしろ女性らしい気品の賜物であつた」。

それでは「女性らしい気品」とは何か。年代記はこう続けている。「彼女には天性のつましさと生來の恥じらいの心が備わつていた」。また、「女性の唯一の誇りと譽れである恥じらいが彼女の特質とな

つていた」とも書いてある。同様に、ドゥウーゴシユはヤドヴィーガについて次のような表現をも残している。「美貌を越える高潔さがあり、端麗さを越える恥じらいの心があつた。美しさ以上に、心の美しさがあり、榮譽と富以上の謙虚さをつましき、權力を越える優しさをもつていた」。

こうした表現から判断すれば、ドゥウーゴシユのいう「女性らしい気品」とは、恥じらいとつましき、謙虚さと優しさであるといいうる。年代記に記されているヤドヴィーガの言行からもそうした美德は十分に窺いうる。

ひとつは、内乱を平定するためにヴィエルコポルスカに進軍したときのことである。ヤギエウオはグニエズノ聖堂参事会に糧食の提供を要求したが、これを拒否されると、同参事会所有の村々から直接糧食を徴発した。この行為に激怒した同参事会長は聖務を停止した。この時、ヤドヴィーガは王の誤りを正して聖務停止の解除に向けて努力し、すべての徴発物資を村々に返却させた。そしてその上で、こう語つたという。「実際わたしたちは村人に牛を返したが、流れた涙は元には戻らないでしょう」。いまひとつは、出産の際の女王の姿勢である。王はヤドヴィーガに、出産に使用するベッドや寢室を金や宝石や真珠をちりばめた布張りや敷布やカーテンで飾るよう勧めたが、女王は部屋から世俗的な豪華さをいっさい取り除き、質素で優しい雰囲気を保ち、そしてそれが、不妊という不名誉を晴らしてくれた神の御心になうと考えていたという。

ドゥウーゴシユが描く理想的女性としてのヤドヴィーガ像は現代においても違和感はない。

## 近世フランスにおける女性と社会

安斎和雄

人間社会の中で女性が占める地位とその果たす役割に関しては、遺伝子レベルでの考察やサル学の発達に伴う新知見が加わる一方、女性解放運動の立場から生じる多くの言説によって、ここ三〇年の間に抜本的な見直しがおこなわれ、その研究は質量ともに著しい発展を遂げた。その結果、十七、八世紀に生じた「社会生成起原論」や「不平等起原論」「原始社会のモデル」などもすべて再点検しなければならなくなつたのである。

しかし、フランスにおける「社会構造の変遷」「女性観の変化」を通覧するなら、そこにもまた、他の分野におけると同様、ギリシア・ローマの伝統とキリスト教の圧倒的な影響、それにゲルマン風俗の進入付加を認めざるを得ない。さらに、そのようにして形成された観念とそこから生じた制度・習慣は、他の面では大きな進歩を見せたフランス近世においても、根本的にはほとんど変わることがなく、ルネサンスも大革命も牢固とした女性観をゆるがすことはできなかつたと言える。つまり、女性の社会的地位が大きく変わらなすには、産業革命と第一次大戦、そしてとりわけ第二次大戦後の世

界情勢をまたねばならなかったのである。

それゆえ、近世フランスにおける女性問題は、突出した一部インテリ・エリートや上流階級の間でこそ華やかで進歩的であるが、それとても大部分は観念と情念の世界のことであり、大多数の農民社会の日常の生活においては「中世」が継続していたと言つてよい。そしてその中世は「女嫌い（ミソジーヌ）」として知られている。

『創世記』のエヴァ以来、女は罪深く不完全な存在であつた。古典古代においても、妻は夫の所有物であり、部分にすぎなかつた。初期教会の聖職者はこの二系統の女性蔑視を引き継ぎ、性を不浄視するドグマを作り上げるのである。

ゲルマンの法は、女性の価値を認め、保護を要する存在と考える点で、前の二潮流とは異つている。殺人者が相手の家族に支払つた贖罪金（ヴェールゲルト）は、娘や寡婦の場合、自由人男子と同じ二〇〇スーであり、既婚婦人の場合には直参（アントルスチオン）へのそれと同額の六〇〇スーであつた。

中世におけるマリア崇拜とそれに由来する騎士のギャラントリ、宮廷風恋愛などにより体質の核心を見誤つてはなるまい。武力・腕力が事を決する社会にあつては、武器を操るに不向きな者は権利を主張できない。かくて女性には政治に参加できず、無能力者となり、封土を持ちえない（女子も封土を継承しうようになるのは一一〇〇年頃から）。それどころか、弱者はともすると贖罪の山羊とされかねなかつた（十七世紀まで活況を呈する魔女狩りを見よ）。

この状況を大きく変え、中世女性史に画期を齎したのはアキテーヌ公ギヨーム十世の娘で、フランス王妃ついでイングランド王妃となつたエレオノールと、イングランド王ヘンリー一世の娘マティルデ

であろう。土地所有者・政權所有者の時代、上流階級の女性にはあらゆる可能性が開けてきたのだが、フランスではついに「女王」の出現が許されなかつた。その代りという言い方はおかしいが、多くの強力な「摂政母后」を輩出したことはフランス史の特徴になつてゐる。

エレオノール・ダキテーヌは、十九世紀までさまざまな形態で続けられる「文芸サロン」の歴史においても創始者と呼ばれてしかるべき地位にある。南仏に発した吟遊詩人を宮廷に招く風習は、彼女によつて北仏に移されたと言われる。同時に詩人による女性賛歌の伝統も始まる。

中世の女性蔑視を代表する作品としてしばしば『パラ物語』の続篇（ジャン・ド・マン作）が挙げられるが、これに対抗して新たな風潮の先駆となつたのが『ジャンヌ・ダルク賛歌』などを書いたクリステイヌ・ド・ピザンであつた。これに端を発し、十六世紀前半まで続く「女性優劣論争」（クレル・デ・ファム）は、のちの「古代人・近代人論争」と同様、フランス人の思考法をよく示している。

十六世紀前半には、フランソワ一世の姉マルグリット・ド・ナヴァールを中心とする宮廷サロンが一国の文化の頂点を築き、宗教戦争による混乱ののちには、パリのランブイエ侯爵夫人の邸宅が「影のアカデミー・フランセーズ」となる。ランブイエ邸こそ「近世会話サロン」の発祥地であり、自国語の純化と耳で聞きとる文芸の発達に果たした役割は限りなく大きい。

十七・十八世紀におけるサロンの盛況とその変遷、主たる女主人の伝記とそこに集つた政治家・文人・思想家たちの動向、サロンで

の会話から醸し出された新思想とその革命への影響等々については、日本でこそ紹介が少ないが、すでに歴大な文献が存在する。ただしそこには常に偏りが見られ、繰返しが多い。十七世紀ならスキュデリ嬢、サブレ夫人、セヴィニエ夫人、ラ・ファイエット夫人。十八世紀に入るとランベール侯夫人、タンサン夫人、ついでジョフラン夫人、デュ・デファン夫人、レスピナス嬢、デピネ夫人というのが定ったコースで、革命近くになつてネッケル夫人のサロンが挙げられる。

かつてレーモン・トルツソンはユートピア思想を論ずるに当り

「十六世紀をトマス・モアとカンパネルラで代表させ、十八世紀をデイドロ、モンテスキュー、モレリ、スウィフトだけに絞るなら、それはユートピアを貧しくさせるだけでなく、裏切ることになえる」と言つたが、同様のことがサロンの歴史についても言えよう。中小のサロンは十七世紀末に八〇〇を数えたという。一八世紀においてはさらにその数を増していた。

たとえばヴォヴレ夫人、フラマラン夫人、ゴントー夫人について、係累を辿り、文化社会での位置づけをせねばなるまい。クレキ侯夫人、シミアン夫人、フィオル夫人、セラン伯夫人、ブロイ夫人、ビュシ夫人、ラマセ伯夫人、デュラス侯夫人、ラ・ヴァリエール夫人、ポリニャック夫人、テセ伯夫人等々、それぞれの伝記と特色を調査して事典を作らねばなるまい。パレ・ロワイヤル、ル・タンブル、プラス・ロワイヤル（現在のプラス・デ・ヴォージュ）、等パリ内では地域別に、近郊・地方都市についても邸の所在を確認し、運営上の経済を尋ね、サロンの文化地理学を立てる必要がある。マルモンテル、モルレ、ジャンリス夫人等々の『回想録』が資料を提供

してくれるが、一八世紀には日記・メモワールの類が山積しているから「サロン社会学」の確立は、今後の課題となろう。

一方、近年発達した歴史人口学はその成果として、アンシアン・レジーム下のフランス女性の平均的生涯を示してくれ、サロンを形成したような上流婦人との相違を明らかにした。大部分の一般女性は二五、六歳で結婚し、四一、二歳で更年期に入る。その間、二年半に一回出産し、六、七人の子を儲ける、というのである。これは王侯貴族の家庭にのみ注目して考えていた「女の一生」とかなりの相違がある。従来の常識に比し著しく晩婚であり、妊娠・出産の回数も思つたより少ない。

疫病死・餓死・事故死の多い時代であるし、幼児死亡は上流・下流の区別なく多いから、平均寿命を算出することはあまり意味がないが、女性のほうが長生きの素質をもち、疫病にも強かつたであろうことは想像できる。男でもフォントネルのように百歳まで生きた人がいるのだから、ニノン・ド・ランクロ（八五歳）より長寿を保つた婦人もいたことであろう。だが實際上、長寿の女性が少ないとなれば、社会状況・生活条件が男より女のほうに厳しかった証拠であろう。

女子教育についても、フェヌロン以来フランスには先駆的著作が多いし、マントノン夫人のように実際に学校を創設する例もある。ダランベールはアカデミー・フランセーズに女性を入れるべきだと主張し、そのための四議席を設けようとした（しかしこの案は実現はせず、女性アカデミー会員は二〇世紀後半のユルスナール女史になつてようやく出現する）。

ルソーにおける言行の不一致を見ても、一九七〇年までフランス

民法には家長権が保たれていた事実からしても、婦人参政権実施の遅れからいっても、フランスの社会と文化が男性中心であることは明白である。この厳然たる壁があつたからこそ、各種の議論が湧き起こり、特殊な文化（一見女性優位かと思わせる）が生じたのであろう。それは、確固たるカトリック社会だつたからこそ、激しい無神論や政教分離思想が育つたともいえる、フランスに特有な緊張関係を連想させる。

## ロシア史における女性と社会

山本俊朗

アレクサンドル・ラデーシチェフは『ペテルブルクからモスクワへの旅』の中で、農奴の生息を活寫し、ロシア社会の問題点として、農奴制の存在を指摘した。一九世紀に入つて、ロシアの軍隊が国外に出動するにつれて、この自国の後進性は多くのロシア将兵に認識された。ニコライ・トウルゲーネフは、一八一八年、『租税試論』を公刊して、農奴解放こそロシア国家の最大の急務であること

を財政学に立脚して論証した。プーシキンは尊敬するニコライ・トウルゲーネフのこの農奴解放思想を詩に歌いあげた。

こうして一九世紀前半のロシアの貴族たちは農奴制がもはや時代後れであることを理解していた。だがかれらは解放に踏みきろうとはしなかった。

ニコライ・トウルゲーネフは乞われて結社のメンバーとなり、農奴解放運動を推進しようとした。しかし、現実には結社の同志はかれを裏ぎつて、解放は進まなかつた。またデカブリストの乱の欠席裁判で首謀者の一人として死刑を宣告されたが、かれはこれを不当として審理のやり直しを要請した。ロシア官憲は国外のトウルゲーネフを追求、逮捕しようとしてつねらつた。こうしてかれは終生を亡命者として西ヨーロッパで過すことになつた。これらいくたの経験から、亡命先で多くの論説を発表した。それらはロシア社会にたいする痛烈な批判であり、西欧社会との比較論である。

## 二

かれはロシア社会について次のように述べる。

「ロシア社会には根本的な欠陥がある。ロシアは国家も個人もまだ未開の状態にある。文明国家では裁判の執行には煩雑な手続が必要で、被告人の安全が慎重に保障されている。しかし未開人にはその理由が納得できない。人命の輕視は野蛮人の特性で、奴隸制に慣れたロシア社会では、正しい思想が成長することが困難である。社会で最も必要なものは正義、公正の感覚であり、人間の生命の尊厳を尊重することである。眞の文明と野蛮とを区別するものはないよ

りもこうした感覚の有無である。ロシア社会では、自分は文明人であると信じている人々でも、この真の文明の要素がいちじるしく欠けている。それがどんなに甚だしいかは想像すらできない。正義や公正の観念はロシアではほとんど知られていない。人間の尊厳や生命の軽視がまかり通っている。」

右のように述べるトウルゲーネフはロシア社会はまだ未開状態にあると言う。西欧社会と比較するとき、ロシアには道徳上の、また公共の厳しい非難がまつたかないと言う。一見、正直で、知人には親切で慈善にも励むような人物が、西欧では絶対に許されない顔をそむけるような重罪や過失を平気で犯す、とかれは言う。文明社会には有言、無言の社会の非難というものがあり、その対象とされた者はしばしば自殺にさえ追いやられる。ところがロシア社会にはそうした非難というものが、まつたかないと指摘している。

トウルゲーネフのこの主張は、現代のロシア人社会、とくにかつてのソ連邦政府のたどった歴史にも顯著にうかがわれる。目的のためには手段を選ばない。史上類を見ないようなあいつぐ肅清。人命の軽視。トウルゲーネフは今日もおロシアには真の文明がないと言うであろう。

しかし論者はこれこそ西欧社会に毒された見解だと見なす。トルストイはつねに言う。趣旨はロシア的というのは家族的なつながり、家族全体の生活をつつんでいるふんわりとした暖かさのことだと。論者は言う。こうした家族意識はトルストイだけに特有のものではなく、多かれ少なかれ、無意識的な本能としてロシア人すべてがもっている感情である。近代西欧の家族がいわば法で保護されているのとは根本的な違いがあるのだと。ロシア人は好んで「われわれは

みな弱い、欠点のある者、互いに共感し、同情しあうのだと」言う。かれらは「物は使えればよい。その物を自分が完全に所有する必要はない」と思っている。だから泥棒にさえ同情し、共感する。かれらは西欧的合理主義が誤りなのだと考える。

「西欧の人々がロシア人と接触して何よりもいらさらせられるのは、ロシア人が論理と法とを、それ以上の、あるいはそれ以下であるかもしれない何かを理由にして、軽視することである。」ロシア人の考え方によれば、「人間の行為そのものは、法律、習慣、礼儀、絶対的な命令、その他なんであれ、外から人間の良心に押しつけられる規則に一致しているか、いかなかなどで判断されるものではなく」、「人間の諸権利とは関係なく、・・・人間愛に関係する」という。「ロシア正教がどうしてもカトリシズムと意見が合わないのは、ローマ教会の教義にも法律精神が侵みこんでいるようにみえるから」であつて、ロシア社会と西欧の法思想とはかみ合わない。さらにロシア人は「愛や哀れみは、正義を越えたものであるばかりでなく、正義を廃止し、無用のものとすることを目指す。」

トウルゲーネフのロシア社会にたいする批判の厳しさは近代西欧のそれであつて、次元の違いさえ感じる。しかしいまやソ連邦が解体し、ロシア社会が西欧社会に近づこうとするならば、こうした感覚の違いこそ最大の問題点となるであろう。

ともあれ、トウルゲーネフはロシア社会には真の文明がないと言う。ロシア社会にあるのはたんに人と人との関係だけで、公正とか正義に献身するという観念が成長しないと極言する。

しかしそのロシアにも救いはあるとトウルゲーネフは言う。それはときにロシア人女性が示すさまざまなまでの自己犠牲、正義にたいする献身、政府にたいする抗議行動であること。トウルゲーネフは「例によつてこの場合にも、ものすごく果敢な行動を示したのは、とくに女性であつた」と述べて、デカブリストの乱の後の抗議行動における女性——ニキータ・ミハイロヴィッチ・ムラヴィヨフ夫人、トルベツコイ公夫人、ヴォルコンスキー夫人、イエレーナ・アレクサンドロヴィッチ・ベストゥージェヴァを挙げる。

トウルゲーネフは未開状態にあるロシア社会、真の文明社会への進展に絶望しながら、ロシア女性のたぐい稀れな美質に期待を寄せる。かれは言う。「神の正義が存在することや、人間性が完成可能なことを信じるために、人はそれを必要とする」のだと。つまりロシア社会が危機に陥つたときに、決起するのがロシアの女性であるとトウルゲーネフは言う。

かれとほぼ同じ時期に、農民の女子教育を提唱した人物にカラージンがいる。かれは女性の能力をひき出すことが社会に有益であるゆえんを力説し、このためのカリキュラムを作成している。かれのこの提案は当時として斬新なものではあつたが、トウルゲーネフが女性に寄せるほど痛切には響かない。

ロシア社会に厳存した農奴制。ロシア社会における女性という観点は人間解放があつてこそその視点であつたのであろう。一九世紀半ばまで、ロシア社会の女性に視点をすることは例外的であつた。

トウルゲーネフが女性に寄せた期待は一九世紀後半に入つて、にわかには花を開いた。ナロードニキ運動に女性が輩出した。ロシア革

命前史は彼女たちの活躍なしには語りえない。ソフィア・パルディナ、ヴェーラ・ザスリッチ、エレーナ・ロツシコヴァ、ヴェーラ・フィグネルなど枚挙にいとまない。

かつて農奴として、日々酷使されて社会を顧みる暇がなかつたロシア人女性が、いまやトウルゲーネフの期待をそのままに新生ロシアの社会の建設に、公共の場でどのような比重を占めることになるであろうか。

#### 主要参考文献

- Н. Тургенев, *О судьбе русского и о судьбе новорусских в России*, 1860.  
N. Tourgueneff, *Un dernier mot sur l'émancipation des serfs en Russie*, Paris, 1860.  
N・トウルゲーネフ著 山本俊朗訳 『亡命者の手記』 恒文社 一九七九  
山本俊朗 「カラージン伝説書」 (『アレクサンドル一世時代史の研究』所収)  
W・ヴェイドレ著 山本俊朗他訳 『ロシア文化の運命』 冬樹社 一九七二

#### ミルと婦人参政権運動の再考

J・S・ミルは、イギリスの婦人解放思想の先駆者の一人であるばかりでなく、現実の婦人参政権運動に画期的な役割を演じたことは、もはや疑問の余地がないと思われる。私も、ミルが庶民院議員として婦人参政権を議院に提案したことを中心にいささかこの問題に触れたことがある。しかし、従来、落選してのちの婦人参政権運動とミルとの関連については、まとまった研究は見られず、私もその点については簡略に述べるに止まった。ここに取りあげる Barbara Caine, 'John Stuart Mill and the English Women's Movement' *Historical Studies* (Australia and New Zealand) Vol.18, No.70 は、その欠を補う一つのものといえよう。そこで、この論文を紹介し、いくらか論評を試みたい。

この論文の特色としては、当時の実際の婦人運動におけるミルの役割をきわめて批判的に捉え、ある意味では、ミルの意外な側面を明らかにしようとしたところにある。

ケインといえども、婦選運動におけるミルの貢献については議論の余地がないことは認める。しかし彼女は、十九世紀後半に現実に存在することになった婦人運動そのものに對するミルの姿勢と、更には婦人自身の解放への参加の問題についてのミルの考え方には問題があるというのである。

彼女がミルを批判する第一は、ミルがその『自伝』のなかで、議会における彼の参政権提案から婦人参政権運動は発足したと主張し、

その提案以前の非公式の婦人参政権委員会の存在を無視し、しかも、婦人参政権協会の結成者として、もっぱら自らの義娘、ヘレン・テイラーを挙げている点にあった。ミルは「婦人参政権ロンドン国民協会」の確立にヘレンを通じて間接に関与した。ケインがミルを批判する点は、既述のように、ミルが初期の婦人運動について関心を示さないことにあった。一八五〇年代の終りの運動、例えば、*English Women's Journal* の創刊や新しく女子雇用を開拓しようとする企てなどを価値のないものと見なしたというのである。その原因をケインは、婦人参政権第一主義というミルの急進主義に見いだし、この急進主義がミルを誤らせたと考える。そしてこれが、ミルの当時の婦人参政権運動に対する基本的立場であり、他の協会や婦人指導者と意見を異にする要因ともなるのである。

もとより、ミルも、婦人参政権のみでなく、婦人の社会的地位の向上のために努力していることはケインも認める。ミルは、女子の高等教育実現のために種々尽力しているし、一八七〇年には、問題の売春婦の強制検診制を定めた「伝染病法」について、それは身体自由の自由に反するとして、王立委員会で反対の証言を行なっている。しかし、ケインは、その一年後にミルは、婦人参政権運動とこの

「伝染病法」反対運動とを結合することに反対するようになった。ミルは両者を結合しようとする人々を破廉恥でオポテュニストであると評するにいたる。この問題こそ、ミルの影響下にあるロンドン参政権グループが他の協会と手を結ばず、他のより大きな団体と合併しない原因であつたと彼女は論ずる。ジョン・ブライトやリディア・ベッカーらによつて各地のあらゆる参政権暫定協会を結集して一八七二年に結成された中央委員会のメンバーにロンドン協会が加



わらなかったのはこのためであつた。一八六〇年代末まで、ミルとヘレン・ティラーは、マンチエスター・グループを支持していたにもかかわらず、数年後には、断固としてマンチエスター協会から分離しようとした。この「伝染病法」反対運動に反対するミルの立場こそ、ケインが彼を批判するもつとも中心的な点であつた。参政権の必要を第一とし、他の宣伝を無視するこのミルの態度が、彼をして悪しき戦略家たらしめたというのである。

このようなミルの態度の根底にあるものは、婦人問題に対する彼のプラグマティックな接近法であるとケインは考えている。ミルが「伝染病法」反対活動に反対する真の理由は、一八七一年に明らかになつた、この活動に対する一般の反対が大きかつたことであつたと彼女はいう。ミルは、一般がこの宣伝活動を「たしなみがなく、女性らしくない」と考えるゆえに、婦選とこの活動との結合は、婦選活動にとつてマイナスであると、一八七二年五月十五日のジョン・ケアンズ宛の手紙のなかで書いている、とケインは指摘した。ミルの戦術は、婦選が革命的でないことを主張することにあつた。こうしてケインは、ミル自身が、本来は不正であると考える法の廃止運動を非難するのは異常であると批判するのである。

このようなミルのプラグマティズムは、彼のロンドン協会の運営にあたつても現れている。彼は同協会に、未婚婦人書記のみでなく既婚婦人の書記をおくことの重要性を説いたが、そのさいミルは、有能な婦人を必須とするのはもちろんだが、かなり不適格な者をも、その容貌の美しさと女性らしさの故にその地位にとどめようとしたという事実をケインは強調した。このような婦人の存在は、男性に對してばかりでなく、若い婦人に対して有効であるとミルは考えた

というのである。

のみならず、ミルの婦人運動組織に対する態度にも大きな問題があるとケインはいう。ミルが直接、間接に影響力を行使したのは、既述のように、ロンドン婦人参政権協会であつた。ミルは、ヘレン・ティラーを通じて、この協会に対し大きな力をおよぼした。しかもその力は、ケインによると恣意的で独裁的であつた。ミルはロンドン委員会に直接関与することを拒否し、もっぱらヘレン・ティラーを通じて影響力を行使した。しかし、ヘレンは、ミルと近いという理由でその意見が傾聴され、自己の同意しない考えに遇うと、自分とミルの辞任をもつて威嚇するという欠点を示した。彼女は、共同することの難しい人で、反社会的で非妥協的であり、小事を大きな障害に変える傾向があり、極端に意見を変える性格であつた、とケインは酷評する。しかもミルは、男性がロンドン協会の執行部入り認められるようになるとこれに加わつたが、委員会の委員に對する彼の一般的嫌惡の念において、ほぼヘレンに従うように思われた。ミルも公然と運動に對する支持を撤回するという威嚇を行い、彼と意見を異にする人を信頼するに足りない者と考えた。ケインによると、ミルとヘレン・ティラーとは婦選運動に直接関与することを拒んだ。一八七二年、ミルはロンドン協会の会長となつたが、それは、名目上にすぎず、彼の名前を同協会に許しただけであつた。ヘレンも健康上の理由と公生活を好まぬという理由から、直接の関与を好まなかつた。ミルは、彼ら兩人からは独立の委員会を望んだ。しかしケインは、実際にはそうではなく、クルーム・ロバートソンに詳細な指示を与え、ミルは自の好まぬ委員を排除したという。一八七二年に、ミルはロバートソン宛にこう書いた。この協会は主と

して自分の名前によって結合されており、自分の意見に依存している。そこで、自分の意見がある程度まで認められないかぎり、同協会に自分の名を与えておくわけにはいかないと。これは、ミルの威嚇であるとケインは強調した。

ミルは自分の好まぬ人々をつぎつぎと辞任させようとした。まず、ロンドン協会の書記の一人、カロライン・アスハースト・ビッグスで、一八七一年に、彼女が「伝染病法」反対運動に参加したことから、ミルは彼女に反対するようになる。ミルは、同協会の執行委員会が「伝染病法」反対運動を支持するかどうかを決定することを許さなかった。ミルは、彼女の心がまったく他の党派にあると指摘し、委員会に彼女が残れば、静穏で確固たる反対者をもつことになる、とロバートスンに警告した。けつきよく、ビッグスは辞任に追い込まれることになる。

ついでミルが排除しようとしたのは、あのミリセント・ギャレット・フォーセット夫人その人であった。これも、彼女が「伝染病法」反対運動に同情を示したからである。ミルはロバートスンに宛ててこう書いた。彼女は豊富な感覚とエネルギーをもった優れた女性だが経験がない。彼女はこれまで運動を創始したこともないし、これからもなさそうである。思弁的な知性も組織的な知性ももたないから今の二倍の年月を重ねても、優れたゲリラ兵ではあっても、指導者にはまったく適さないだろうと。

ケインは、これ以上の誤りはあり得ないと評した。フォーセット夫人は、ミルの死後わずか二、三年のうちにロンドン協会の指導者となり、一八九〇年代には、全国婦人諸協会すべての指導者となったからである。

こうしてケインは、ミルは理論的には男女の平等を主張したが、実際には、平等者としてハリエット・テイラーとヘレンだけを受け入れたにすぎないと主張した。ナイティンゲールやメアリ・カーペンターのような他の卓越した女性とも長く問題を討議したが、それは参政権闘争についての自己の意見を受け入れるよう説得し、彼女たちの名前を名簿に載せたいためにすぎなかったミルにとつて、婦人参政権が中心問題で他の社会問題はその改革に続くと考えた。投票権の有効性についての彼の信念は異常であつたとケインはいう。

ミルは婦人の解放をほとんど立法上の解放と確信した。婦人がいまだ適切な訓練を受けていない時期において、ミルは安全な信頼できる男性の仲間の方を選んだとケインはいい、婦人はすでにミルが望んだ状態に達していたと結論したのである。

この論文の主要なテーマは、第一に、「伝染病法」に対するミルの態度であり、第二には、その根底にあるミルの参政権第一主義であつた。これらは基本的には戦術上の相違であるといつてよい。参政権第一主義も確かに短見だともいえるが、ケインがいうほど全面的に否定すべきものとも思われない。政治的権利を獲得すれば他の改革はそれに伴つて実現されるという考え方も一つの行き方とはいえよう。従つて、「伝染病法」については、ケインも認めるように、ミルも基本的にはこれに反対なのであるが、ただ当時の良風美俗的風潮からして、それが婦選運動にマイナスに作用することをミルは恐れたといえよう。そこにミルの現実主義があつた。この現実主義的態度は、議会における婦選提案時から見られたものであり、その時期においてはむしろ妥当とも思われたものである。このたびの現実主義の評価も、さらに当時の一般の風潮をさらに調べたうえでな

される必要があろう。この点ケインは批判に急のあまり、その点が不十分であり、説得力に欠けるといえよう。この論文の第三のテーマは、運動の指導者としてのミルの資質に関連するものである。ヘレンに対する過度の信頼は、生前のハリエットに対する敬愛を義娘に移したものとみわれ、ミルの性格における一つの問題点である。また自己と意見を異にする人々を排除しようとする態度は、純理家でありがちなもので、優れた理論家も組織者としては不適格である場合が多い。ミルも例外ではなかったであろうか。いずれにせよ、この論文はいろいろの問題を投げかける論文である。

## 一九世紀のドイツの女性

大内 宏一

ドイツの近代化が本格的に進展した一九世紀において女性が置かれていた地位、そしてそれが被った変化についての研究は、近年、イギリスの女性史研究の影響を受けながらドイツでもめざましい発展を遂げた。ヨーロッパの近代化とは基本的に市民社会の成立と重なり合うものであるから、そのような研究はしばしば市民階層（ビュルガートゥーム）と市民社会の歴史的な意味を問う作業の一環と

いう性格を帯びている。もちろんドイツの女性史研究者たちによって生み出された成果は多岐にわたるが、紙幅の制限もあるので、この報告では、主としてトマス・ニッパダーが彼の名著「ドイツ史」で行っている整理やユルゲン・コツカが組織したビーレフェルト大学学際研究センターの研究プロジェクトの成果に基づきながら、これまで確認されている幾つかの基本的な点を紹介するだけにとどめたい。その際、自明ともいえる次の二つのことに改めて留意する必要がある。すなわち、ドイツにおける発展は、一方においてヨーロッパ諸国に大きく共通する流れの中に位置し、他方において或る程度まで独自の軌跡をたどったということである。いずれか一方の観点だけを強調し過ぎれば歴史的現実を見失う恐れがあるし、同じことはドイツの近代化過程全体についてもいえるであろう。

さて、当然のことながら女性の地位は家庭のありかたと密接な関係がある。この点で重要な意味を持つのは、新しい近代的で市民的な家庭が登場したことである。ドイツの場合、それは一八世紀の後半に教養市民層の間から生まれ、貴族、ついで上層市民に広がっていった。このタイプの家庭の大きな特徴のひとつは、仕事の間と家庭生活の間とが分離した点にある。農村部の農民や都市部の手工業者に代表される伝統的な家庭では、仕事の間と家庭生活の間とが密接に結びついており、女性も生産労働に大きな役割を果たしていた。これに対して、新しいタイプの家庭では、もっぱら男性が外に出て仕事に打ち込み、女性は家庭を守るといった役割分担が明確になっていったのである。同時に、家庭はプライヴァシーの場としての性格を強めた。伝統的な家庭では、しばしば家族以外の人々も同居して、家族個々人のプライヴァシーが著しく制限されていたのに対して、

近代の市民的な家庭は、外部の世界とは一線を画して家族が私的な生活を送る場となり、夫と妻と子供から成る私的な空間となった。そして、家族の間の結び付きが、いわば情緒化された。とりわけ結婚は双方の恋愛感情に基づいて行われるべきであるという建前が、まさに建前として一般化していった。生産の場と密着していた伝統的な家庭においては、結婚は貴重な労働力と生産手段を確保するという意味をも有していた。したがって、妻が夫より年上である場合もけつして珍しくはなかった。しかし、新しいタイプの家庭では、妻が夫よりも年下であるのが通例となり、生活力のある夫が愛する妻と子供を保護するべきものと考えられるようになったのである。

このような近代の市民的な家庭は、一面では女性の負担を軽減したといつてよい。なるほど、市民的な家庭でも女性は家事労働を引き受けねばならなかったし、富裕な家庭でも家を切り盛りしながら社交上の役割を果たすのは容易な仕事ではなかったが、家庭外の仕事は基本的には夫であり家長である男性の手に委ねられた。しかし、このことはかならずしも女性の解放を意味したわけではなく、むしろ女性の役割を一定の枠の中に限定し、押し込める結果をもたらした。生産の場から切り離されたことによつて、女性は家庭に閉じ込められたのである。そのような枠の中で「男らしさ」、「女らしさ」について一群のステロ版的なイメージが形成されて、広められた。たとえば、男性が理性や知性や意志を代表するのに対して女性は感情、清らかな心、献身的な愛情などを体現するものとされ、男性は積極的で攻撃的な存在であるのに対して女性は消極的で受け身の存在であるとされた。問題は、そのような二分論の内容の当否にあるのではなく、そのような二分論を適用するもとで女性が具えるべ

き特性が指定され、そして女性が社会の中で果たし得る役割の可能性が大きく狭められたところにある。たとえば、教育の面でも、女性には家政や手芸以外に文学や音楽などを修めれば十分であるとされた。

以上のような近代の市民的な家庭は、ドイツでも他のヨーロッパ諸国でも、当初は数の上では限られていた。数の上で圧倒的に多かったのは下層民衆の家庭である。このタイプの家庭でも、工業化の進展にともなつて、やはり職場と家庭が分離する。その点では市民的な家庭と同じだが、家庭生活の質は大きく異なる。プライヴァシーを保てるような居住空間が存在しないし、そしてしばしば家長である夫の収入だけでは生活できなかつたために女性も働いて生活を支えていたからである。それは、「暴君的な夫とたくましい妻」といったイメージで代表されるような家庭であつた。

しかしながら、一九世紀の発展傾向を代表していたのは、やはり上述のごとき市民的な家庭のタイプ、そしてその枠の中の女性の役割であつたといつてよからう。このことは、たとえば、下層の人々の中でも熟練労働者のように生活に幾分なりとも余裕ができた人々は妻に仕事をやめさせて家庭に専念させようとする傾向がはつきりと見られたこと、また一九世紀の末に大量に出現した事務職員層（「新中間層」）が同様の行動をとつたことから窺える。いうならば市民的な家庭とそれにもなう女性像は規範的な浸透力を持つていたのであつた。そしてまた、このような発展傾向は、ドイツに限られたものではなく、多少の程度の差や時間的なギャップはあつてもヨーロッパ諸国に共通して見られる現象であり、ヨーロッパ全体の近代化の一部分を成すものといつてよい。

さて、一九世紀の後半に入ると、市民的な家庭が女性に設定した枠を打破しようとする動きがまさにその市民的な家庭によつて生み出される。女性の社会進出をめざす女性解放運動を指導し、運動に参加したのはほとんど例外なく市民的な家庭の出身者だったからである。社会主義と関わりのない女性解放運動の場合にはとくにそうだった。彼女たちの多くは、理解ある両親のもとで高度な教育を受ける機会に恵まれながら職業生活の面で自己の才能を発揮することを阻まれた人々だった。ところで、ドイツの市民的な女性解放運動のひとつの特徴として、たとえばイギリスのフェミニズム運動と較べれば全般的にかなり穏やかな性格を帯びていたということがしばしば指摘されている。そして、それは両国の女性の置かれていた状況の違いを或る程度まで反映したものと考えることができるのである。

この点で興味深いのは、少なくとも一九世紀の半ばまではドイツの広い地域の女性のほうがイギリスの女性よりも民法の面では恵まれた立場にあつたという、ウルズラ・フォーゲルやデイルク・ブラジウスの指摘である。一八世紀の末に制定されたプロイセンの一般ラント法は、啓蒙主義の影響を受けつつ、女性をも法的人格として認める原則に立っていた。これに対して、イギリスの家族法は中世的な色彩を色濃く残していた。このため、たとえばプロイセンでは離婚する（女性の側から申し立てることが圧倒的に多かった）のが比較的容易であつたのに対して、イギリスでは一八五七年まで完全な離婚を行えるのは貴族に限られていた。また、財産権に関して、イギリスでは一八八〇年代まで既婚女性と単身女性とを完全に区別して、後者にだけ財産権を認めて前者については全面的に夫の支配

下に置いたのに対して、プロイセンの一般ラント法は部分的には妻にも財産権を認めており、少なくとも財産に関する代理権や留保権を認めていた。それゆえ、一九世紀の半ば頃の時点では法律上の女性の地位の到達点は一般にドイツのほうがイギリスよりも高かったと考えるよいだろう。

しかし、それ以降の両国の発展はほぼ逆転するのである。ドイツでは、帝国成立後の法制の統一化がかならずしも女性の地位の向上をもたらさなかつた。一九世紀最後の年に施行されたドイツ民法典は、家庭と社会における男性支配の現実を追認し、いっそう強化しようとする傾向を明白に有していた。そのような傾向を理由づけようとした様々な主張の中には、社会が流動化し、平等化への流れが次第に強まるもとで、男性支配下の家庭を「良き秩序」の最後の砦として守り抜こうとする意図が読み取れる。このような強固な抵抗に取り囲まれる中で、市民的な女性解放運動もかなり穏やかな性格を帯びるにいたつたのであつた。これに対して、イギリスでは、単身女性の法的権利のように一部分の人々に関してすでに明確に認知され確立されている権利を一般の女性にも広げる方向へ向かつた。その際、ジョン・スチュアート・ミルのような多大の影響力を持つ言論人が支援したことや世論の動向に敏感でしかも決定的な権限を持つ議会が存在したことが、イギリスの女性の地位向上を大きく助けることになつた。より一般的に言えば、イギリスにはドイツよりもリベラルな社会が存在したことが、一九世紀後半における両国の軌跡の違いを生み出したといえよう。

とはいえ、ドイツとイギリスの違いだけをひたすら強調するのは、やはり避けるべきであろう。ペースの違いがあつたとはいえ、しか

しドイツの女性の社会的な地位も第一次世界大戦直前の時点では五〇年前に較べて間違ひなく向上していた。確かに市民社会の成立はそのまま女性の解放をもたらしたわけではなく、むしろ女性を一定の狭い枠の中に押し込めるという結果をもたらした。しかし、同じ市民社会はその枠を打ち破るようなダイナミズムをも内に孕んでいたであつて、このことはドイツについても当てはまるのである。

## 一九世紀北欧（デンマーク）の女性と社会

村井 誠人

北欧の中で、歴史的・社会的状況がさまざまな面で最も西欧と似かよつた傾向を示すのはデンマークである。もしも女性の地位の社会史的権利の問題を西欧の社会の枠組において発達史的観点で捉えることが可能であるという前提にたつならば、一九世紀以降の似かよつた社会経済史的な北欧社会の状況からいつても、また女性の権利をそういつた枠組にあてはめて考察していこうと意図することから、デンマーク社会の当該問題のケース・スタディをもつて北欧の全般的傾向を多少なりとも物語るものと見なしていくことに、そ

れほどの現実的かつ論理的飛躍があるものとは思われない。

北欧においては、一九世紀の前半まではどこにおいてもいわゆる「農村型社会」であり、首都といくつかの地方都市のみが例外的な手工業者のギルド制が温存された社会であり、一八三四年でも、デンマークでは八〇%の人口が農村で生活していた。首都コペンハーゲン王国の総人口（一二三万一千人）の約一割にあたる一二万一千人が居住し、第二の都市オーゼンセが八千七百人で、他のいかなる地方都市も五千人を越えるところはなかった。一八四八年に絶対王政は終焉し、四九年に自由主義的憲法が制定され、社会そのものが市民生活上のブルジョア的自由主義の実質的実現に動きだしたのは、五〇年代になつてからであつた。社会生活状況のうえでの注目すべき変革は、一八五七年の職業の選択の自由を保障したギルド制 *Lausystem* の廃止法等の関連三法の施行であつた。商工業の発達はこの準備され、ギルド制によつて「職業」を男性によつて独占されていた状況がうちやぶられたことになるに加えて、女性の地位に関してもその関連法によつて大きな改善が施された。すなわち、二五才以上の未婚女性に男性と同等の社会的権利が付与され、伝統的な、妻・母・住みこみの女中以外には合法的存在が殆どありえなかつた女性に、職業に就く自由が与えられたのである。親の財産の相続に關しても、それまでの男子三分の二、女子三分の一という割合が改正され、男女は対等となつた。とはいえ、それでも未婚でなら男性と対等ではあつても、結婚したとたんに女性は夫である男性にすべての権利を譲るものとされ、子供に対する養育権は一九二五年まで認められなかつたのである。こうした社会状況はノルウェーも同じで、イブセンの『人形の家』は書かれたのである。

しかしこれらの同権に向かった動きは、女性側の「闘争」による成果ではなかった。女性が早朝の乳搾りに始まる日常生活に追われる農村はいわずもがな、都市でも下層民の女性は日々の暮らしに追われ、彼女達のうちから何らの社会的動きは見うけられなかったが、インテリの家庭で育った女性達の中からようやく五〇年代に入って女性の社会的地位の向上を求める言動が現われた。マティルド・フイバー Mathilde Fibiger (一八三〇—七二) が一八五一年、女性の知的生活上の男性との同権を主張した『二通の手紙』を著したのが、デンマークでは最初の女性からの発言であった。彼女をはじめとするこうしたインテリ女性たちにとつても、職業としてはわずかに家庭教師、私立女子学校の教員になることが社会参加ということであり、職業選択の自由が確立されても都市の一般の女性達は、ようやく始まった工業化に伴って生じた職場である縫製工場・煙草工場等の労働者として生活を送るようになっていった。そのインテリ女性たちの存在ゆえに、デンマーク最初の女性による地位向上を求めた社会組織「デンマーク女性協会」Dansk Kvindesamfund が一八七一年につくられた。後のノーベル賞作家フリゼリク・バイア Frederik Bajør (一八三七—一九二二) とその夫人マティルド (一八四〇—一九三四) が自らが会員であるジュネーブの国際女性協会の支部としてそれを結成したが、同年中にその支部であることを取り上げ、純粹に国内的組織として出発した。そこにはイギリスの J・S・ミルが一八六九年に著した『女性の従属』を同年中にゲオウ・ブランデス Georg Brandes (一八四二—一九二七) がデンマーク語に翻訳し、大いに国内で女性の地位の問題が議論されたという背景があった。バイア夫人が初代の会長となり、この組織の

もとで「女子商業学校」、「絵画・工芸技術学校」、「女性労働者日曜学校」等の女性のための職業訓練学校を設立して女性の社会進出を促すことを目標とした。一八八〇年には会員数は一二一人を数えた。彼女らは既婚女性の経済的地位をも問題にし、その年には既婚女性の就職が法律によつて認められ、さらにようやく一八九九年の法において既婚女性も財産に対する夫と平等の権利が保障されることになった。

彼女らの組織が「インターナショナル」の名称とその実質を避けた理由は、一八七一年のまさにその年、「インターナショナル」の支部がコペンハーゲンに設立されたことと一線を画す必要があったためであろうし、現実には彼女らの要求は階級的ではない「市民的権利の追求」にこだわつたためであった。したがって、女性の工場労働者の立場・賃金問題(——同一労働賃金格差は、女性の賃金は男性の約五五%前後——)に対する対応は、労働者の中から組織され、それは社会主義運動の枠組の中から生まれていった。たとえば、七年の「インターナショナル」の活動の停止につづいて翌年、非合法化された際に逮捕された三人の指導者ルイ・ピーオ Louis Pio (一八四二—一九四四)、パウル・ゲレフ Paul Geleff (一八四二—一九二八)、ハール・ブリクス Harald Brix (一八四一—八一) を支援するために募金を集めたのは「自由女性協会」Den frie kvindelige Forening であつた。社会主義的傾向を帯びた業種別の女性労働協会がいくつもできていき、一八八五年それらのうちで最も注目すべき「女性労働者連盟」Kvindelige Arbejderforbund が組織され、九六年には最初のストライキを実行したのであつた。

コペンハーゲンの工業化の様子は、次の数字が物語っている。す

なわち、一八五二年にコペンハーゲンでは百人以上の労働者を擁する職場数は四ないし五しかなかったが、七二年には三七となっており、この間、労働者が首都へと集中しはじめ、一八六〇年、一六三、〇〇〇人の首都人口が七〇年には一九八、〇〇〇人へ増加している。この人口増は工場生産高の増加と労働者階級の確実な増加を意味し、スラム化現象が首都の一部に現れた。こうした状況が労働者の政党が組織化される下地となり、前述の「インターナショナル」の支部が七一年一〇月一五日コペンハーゲンに誕生した。七三年にピトーら幹部の五年間の収監が判決として下され、同時に組織が非合法化されると、かわつて「民主労働者協会」Demokratisk Arbejdsforening が設立され、翌七四年にはそれが「社会民主党」と改称された。この党が女性労働者らの業種別組織の動きと連動するものである。

一方、「デンマーク女性協会」側は八六年以降分裂をくりかえしていったが、基本的にはその主流は常に生き続け、全国組織として会員数約七百名を数え、その傘下に「看護婦協会」、「家政婦協会」、YMCA (KFUK) 等を組織し、社会主義的傾向の女性労働運動と一線を画す形で存続したのであった。

そして女性の地位の問題が最も具体的に現れたのは、参政権に関わる一連の動きであろう。これは階級闘争の側とインテリ女性の側双方から出てくる当然の要求であった。社会民主党は最初にこの問題を綱領に採用した政党ではあつても、やはり男性を中心とする社会の中の一政党であつたために必ずしも初めから女性の社会的・政治的平等を完全に求めようとはしていなかった。すなわち、この問題は完全に女性側のイニシアティブが要求されるものであつた。一

八八年前述のフレゼリク・バイアが下院でコペンハーゲン市議会議員選挙への女性参政権を要求したが、それは下院では採決されたが、上院では不採決となつた。翌年には彼が女性納税者に対する地方選挙への参政権を要求し、全国から二万人の署名を添えて提議したが、再び上院において却下された。これらが公的な場における女性参政権が扱われた当初の状況であつた。一九〇一年の「体制変化」systemskiftet によつて下院を基調とする内閣が誕生すべき議会主義が実現され、デンマーク社会は大きく民主的方向に拍車がかけられた。一九〇三年から女性教区委員選挙へ、また一九〇五年、児童福祉委員選挙へ参加するようになった。そして、一九〇六年のフィンランドでの完全な女性参政権の確立、また翌年には一九〇一年の地方選挙への参政権を得ていたノルウェー女性による国会への制限つき参政権の獲得が、大きな刺激となり、一九〇八年にデンマーク女性男性と同じ条件で地方議会への参政権をえた。翌年の地方議会では、全国九、八〇九議席中一二七議席を女性が得て、その後に全政党が国会への女性参政権を要求することで一致した。それには憲法改正による上院の選挙権の平等化が不可欠であり、そこに一致は見いだせなかつたが、一九一三年、協力関係にある急進左翼党と社会民主党とが下院で過半数を獲得し、憲法改正への道は開けた。一九一四年第一次世界大戦の勃発によつて憲法改正問題は棚上げされたが、一五年六月五日、国王クリスチャン十世の新憲法への署名によつて、完全な女性参政権がデンマークで成立したことになる。同日、「デンマーク女性国民協議会」Dansk Kvinders Nationalråd が組織した一万二千人の女性による国王に対する感謝行進が行われ、ほとんどの女性の組織・団体がそれに参加した。参加をしなかつた



組織は「右翼婦人会」と「社会民主党女性協会」の二者であり、前者は富者の特権が失われたことに対するわだかまりからであり、後者は同党の憲法改正の祝典に参加することを優先させたためであった。女性の連帯よりも、政党内の絆がこんなときにも優先されたのである。

以上のことを主として Inga Dahlsgård red. *Kvindeløstelsen huem. huad. huor*, København 1975. を参考に論じてきたわけであるが、北欧が女性の地位や解放の先進地として注目されるのはむしろ現代であつて、以上の状況はその出発点である。女性が国政参政権を獲得したのが世界史の中ではかなり早いほうであるとはいえ、特別に理念においてきわだつわけでもない状況から、例えば現ノルウェー政府一八人の閣僚のうち八人まで女性が占め、またデンマークでは四人の閣僚が女性であるというような「男女平等の国」への道を、北欧社会はたどってきたのである。人口が少なく階層的には均質性の高い社会で、一九六〇年代の経済的繁栄を背景に必然的に労働力として家庭婦人を家から外へひっぱりだす結果となり、そこにおける男女同一賃金の要求と六〇年代末に始まる社会意識の大変革によって、女性を含むすべての社会的枠組の変化が生じたのであつた。そのことを検討することは別の機会にゆずり、ここではその問題の原初的歴史背景を確認することのみで終る。

#### 参考文献

Inga Dahlsgård red. *Kvindeløstelsen huem. huad. huor*, København 1975.

Vagn Dybdahl, *Det nye samfund på vej 1871-1913*, København 1982.

Tinne Vammen, *Rent og urent-Hovedstadens piger og fruer 1880-1920*, København 1986.

Lisbet Hammer m.m. red., *Heks, hore, ærbø kore-Kvindeløst på landet i 1800-tallet*, Roskilde 1987.

Elisabeth Andersen, *Fejekost og stjerneref*, København 1988.

Anne Margrete Berg, Lis Frost og Anne Olsen red., *Kvindeløst I, II*, København 1984.

Hans Hertel og Sven Møller Kristensen red., *Den politiske Georg Brandes*, København 1973.